新制大日本讀本

巻七

3759
F10
資料室

42547
教科書文庫
4
810
44-1933
200030
2104

資料室

325.9
Fu10

昭和六年十一月九日中學國語漢文科用
昭和八年七月六日實業學校國語科用
文部省檢定濟

文學博士 藤村作編

新制大日本讀本

東京 大日本圖書株式會社

新制大日本讀本　卷七

目次

一　日本精神と世界精神　藤村作　一
二　櫻花記　笹川臨風　八
三　春の曲　北原白秋　二一
　一　竹林の早春　二一
　二　ころころ蛙の歌　二三
四　三國干渉　陸奥宗光　二五
五　坂本龍馬　眞山青果　二五

○六　四季の雨　（花月草紙）　三七
○七　旅行　山路愛山　四二
○八　落花の雪　（太平記）　四九
九　自由創造の精神　田澤義鋪　五四
一〇　萬里の長城（詩）　土井晚翠　五九
○一一　新島守　（增鏡）　六六
○一二　一茶の俳句　松浦一　七三
一三　ヴァチカン宮殿　稲畑勝太郎　七八
一四　上高地遊記　吉田絃二郎　八九
一五　海戰の前夜　小笠原長生　一〇〇

○一六　俳文二章　（おらが春・新花摘）　一〇四
○一七　はちす葉（和歌）　（古今和歌集）　一一〇
○一八　歌人　島木赤彥　一一四
一九　義經傳說　島津久基　一一八
二〇　現代の青年に與ふ　澁澤榮一　一二八
二一　秋窓雜記　北村透谷　一四〇
二二　寮生活の第一夜　谷崎潤一郎　一四三
二三　曼珠沙華　近松秋江　一五三

廣島大學圖書之印

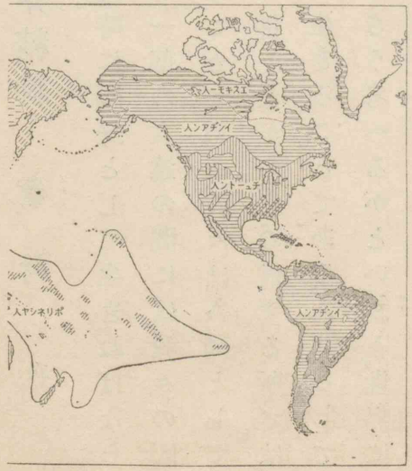
一　日本精神と世界精神

藤村作

我々は人間として生きると同時に、國民として生きねばならぬことは勿論である。近時若い一部の人達の間には、我々の國民として生きることは第二義のことである、我々は人間として生きねばならぬといつてゐる。併しながら、私の信ずる所では、我々の生活の單位は國民として生きることである、人間として生きることではない。どうしてさう考へるかといふと、世界には多くの民族がある。それ等の民族は特殊な血を傳へ、特殊な靈を傳へたものである。我々日本人はその中の一つである所の日本民族に屬する。我々が人間であり得るのは、日本民族であり得ることを通してでなければならない。日本民族でなくしては、どうしても人間たり得ることは出來ないのである。

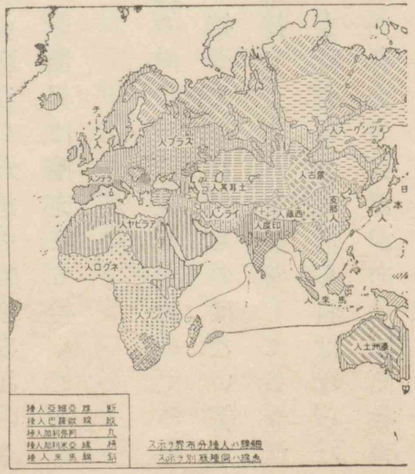
我々の肉體は日本民族の祖先から傳へられた肉體であり、我我の靈魂は日本民族の祖先から分派し來つたものである。さうして、肉體に於ても、靈魂に於ても、あらゆる世界の他の人類から違ふ所の特徴を有して、この特徴を持つことに依つて、世界のあらゆる他の民族から特殊である。この二つの上の特徴を持つてゐるので、我々は何としても他の民族となることを得ないのである。

この同一祖先から傳へた肉體・靈魂の特徴を共通に持つてゐる我々日本民族が、團體的結合をなして、その特徴に依つて特殊なる發展をなすことに努



力するのは如何にも自然なことである。さうして、かういふ團結ほど世に鞏固な國家團結はない筈である。かういふ我が國の持つ特殊な血族的國家團體は、單に主權・人民・國土を三要素として成立してゐる國家とは違ふ。

我々が日本國民として世界に生きる意義・使命は、他の民族の持たない特殊な國民性・國民精神を持つて生きるといふ所にあらう。これを發展させ、又これを世界に擴充する所にあらう。我々日本人の最も長じてゐる特徴の上に創造された文化を、世界に擴げることに依つて、我々の最も大きな寄與が世界人類に


人スラブ
人ゲルマン
人ラテン
人ハロヲ
人ハンガリー
人ウラル
人ヒラ
人ハロヲ
人ハンガリー
人ウラル
人ヒラ
人ハロヲ
人ハンガリー
人ウラル
人ヒラ

なされるであらう。我々にして日本精神を失墜し、日本國民性を小さくしてしまつたならば、我々の世界に生きる意義は失はれ、我々の世界人類に對する使命は滅びるであらう。この意味に於て、我々は人間として生きるといふことを考へる前に、日本國民として、最も正しく且つ大きく生きるといふことを考へねばならない。日本國民として最も正しく、大きく生きるといふことは、日本精神を展開させ、これを世界に擴充して行くことに他ならない。

苟くも日本人として、我が祖先の肉體と靈魂とを傳へてゐるものに、幾分なりとも、日本精神を持つてゐないものはない筈である。けれども、それを確實に把持し、且それを涵養して益々立派なものにして行くには、どうしても教育の力を借らねばならない。こゝに國民教育に於ける國史教育の必要があり、國語教育の必要があり、國文學教育の必要があるのである。」

所がここに考ふべきことがある。世界は時を逐うて變化しつゝある。時代は暫くも靜止しない。隨つて世界は現狀のままに長く止るものでない。國民精神は歷史の悠久を通じて一貫して傳ふべきものではあるが、併しそれは歷史を超越して不變であるべきものではない。時代の變化に應じて、その不備不足なるものは常に補はれ、その不適當なものは適當なものに改められて行かねばならないものである。即ちその本幹は動かすべきではないが、その枝葉は常に補はれ、改められ、又その精神の表れは、常に時代に應じて變化し行くのでなければならない。これを解り易くいへば、他の長を採つて、我の短を補うて行くべきものである。ここに於てか國民教育は國民精神の理解涵養と共に、世界精神・現代精神の理解を必要とする。

廣く世界を見渡して見れば、我々は現代に世界を通じて流れてゐる或精神を見出すことは容易である。西洋にある現象が決して西洋に限られないで、我が東洋にも波及して、日本に支那に同じやうな現象の起ることは、一つや二つに止ることではない。交通・通信機關の發達に由つて、昨日の西洋の事が直に今日東洋に來るといふほどである。これはその底に世界に共通して流るゝ現代精神の在ることを語る事實である。我が日本國は東洋に位置してゐると雖も、日本國民は常にこの世界精神を理解して、世界に適應して變化しつゝ生きて行くことを心掛けねばならない。これを怠るならば、日本精神は固陋に陷り、日本國家は世界に孤立するに至り、それが爲に國家を滅亡に導くこととともなるべきである。國家を世界に孤立の地位に立たせるといふことは、單に國交の上でいはるべきでなく、精神的にもいはるべきことである。さうして、これほど國家の存立・發展に恐るべきことはないのである。

それであるから、我々は傳統の日本精神を縱の絲と見、世界に共通する現代精神を横の絲と見ると、この二つの絲が唯我々の中に不調和に併存するといふのでは困る。若し又この二つの絲が混亂して、互に相矛盾し、衝突するやうなことがあれば、彌困る。否、現にこの二つの精神の不調和・矛盾・衝突は社會の現象として現れてゐる。右と左と相分れて互に相爭ひ、相打つの狀態に在るのである。ここに於てか、我々はこの縱横二つの絲を以て一つの織物を織出すことを志さねばならない。即ちこの二つの精神の調和・統一を目ざして進むことを最も大切な任務としなければならない。一面に於ては、日本精神を生かし、これを磨いて益々立派な光を放たしめ、又一方に於ては世界精神にも共

鳴を保つやうな、穩健中庸であり、大きく東西を抱擁し得る精神を養成することを目標として進むことを努めねばならぬ。換言すれば、日本的であると共に、世界的である所の精神を養成しなければならない。民族的であると共に、國際的である所の精神を養はねばならない。極左の精神が國家を危殆に導くことは誰しもが戒心してゐる所であるが、又それと同樣に極右の精神も亦國家に取つて危險であらねばならない。我々は飽くまでも、この二つの精神の調和・統一を目標として進まねばならない。

二　櫻花記

笹川臨風

櫻は多きがよし。淋しきは其の特色に非ず。賑かなるは其の本性なり。此の點に於ては東京の花を推すべく、京都・奈良の

笹川臨風
明治三年八月、東京神田末廣町に生る。本名は種郎、文學博士國史國文學者。

花は、僅かに自然美・歴史美の點綴に止れり。盛者必衰の理を示すよりは、三日見ぬ間の櫻なるを、此の花の本色とすべし。蓮に厭世の相あり、梅に隱逸の風あり。櫻は樂天的にして、又現世の相をあらはす。

夕の花（增田正宗筆）

日本の花は仰いで見るべし。多くは樹木の花なり。櫻最もよくこれを代表す。西洋の花は俯して愛するを多しとす。大抵は草の花なり。仰ぐものには、天空海濶の意氣あり。俯すものは、沈思冥想のよすがあり。一は概括的にして、一は考察

的なり。

櫻の色は、澹泊にして、紅ならず、白ならず。西洋草花の濃紅・濃紺のものと同じからず。彼は極彩色なれども、これは淡彩なり。東西嗜好の差、火を睹るよりも明かなり。

明麗　（池上秀畝筆）

櫻は簇々的なり、團結的なり、國家的なり、雲の如く霞の如し。他の個人的の花と異なりて、日本國民的なり。その開落の速にして、些の未練氣をとどめざる、飽くまでも武士的なり。

北原白秋　明治十八年福岡縣に生れた。本名は隆吉、詩人。

梅の時候は寒く、藤・牡丹の時候は暑し。櫻と菊とは最も時の可なるもの。然れども菊の後に霜あり、雪あり、冬枯あり、木枯あり。金風肅殺として、絶えて希望なく、快活なし。故に隱逸・遯俗の風あり。櫻の最もよき時候にぱつと開きたるに若かず。

櫻の鉢植は面白からず、活花として妙ならず。櫻は既に室内のものにあらず。これを觀るによきは、天朗かに氣霽れたる戸外にあり。其の本色は依然として快活なり。依然として春なり。

三　春の曲

北原白秋

一　竹林の早春

わが庵の竹の林に、こぬか雨今朝も濕れり。春さきのこぬか雨なり。ふるとしも見えぬ雨なり。こぬか雨笹にこもりて、香

炷けば香もしめりて、事もなし、ただ明らけし。こまごまと濡れかゝるのみ、縹渺と煙曳くのみ。しづかなり、ただ安らなり。顏出して、つくづく居れば、笹子啼き、目白寄り來る。笹葉搖り搖りてまた去る。散りたまる去年の枯葉も、寂しけど寒しともなみ、何かしら萠ゆる綠の、春は早竹の根にあり。よき濕りかくて濕らば、竹煮草・葛・蕗の薹、やゝや

淺き春　（清水有聲筆）

やにすずろき出でむ。鬚長の藪の蒟蒻・莖などやがて咲くべし。松風の聲は沈めど、常ならぬさびしさならず。裏岨ののぼりくだりに、ほつほつと通る馬さへ、時をりは青きつけつゝ、聲高の人の話も、濡れながら行けば親しよ。靜こころ香をつぎつゝ、さて今日もうら安くこそ。こぬか雨ふるがごとくに、こまごまといつくしみてむ春さきの我の思を。

二　ころころ蛙の歌

春さきのころころ蛙、一つ鳴き、二つ鳴き、ころころと後續け鳴き、ふと鳴き止み、くぐみ鳴き、また急に湧きかへり鳴く。いよいよにこゑ合せ鳴く。近き田のころころ蛙、よく聽けば聲たがひ鳴く。聲たがひ、一つ一つに、あなをかし、鳴けるさま見ゆ。あちら向きこちら向き、飛び飛びて、また水くぐり、うちひそみ、頰をふ

くらかし、鳴き鳴ける咽喉のさま見ゆ。あなをかし、近田の蛙、さみどりの根芹が濕る、塗畔かまだ新らしき。雨もよひ雨よぶ聲の、寒けども寒しともなし、寂しけどなにか笑へり。友よびてまた鳴く蛙、遠田にも遙とよもす。あなあはれ、遠田の蛙、また聽けば、遠く隔てて、夜の闇の瀨の音隔てゝ、いや離りうち霞み鳴く。また寄せて近まさり鳴く。遠つ浪邊に寄するごと、遠つ風吹き寄するごと、その聲は夜空つたひて、いよいよに近く響きて、さて絶えてまた續け鳴く。近き田もまた競ひ湧く。初夜過ぎてまた後夜ふけて、なほなほにとよもす聲の、おそらくは夜の明くるまで。崩黄月、月の圓暈、遠近の薄き飛び雲、濡れ濡れてちろめく星の、糠星のかげ白むまで。ころころと、またころころと、夜もすがら、夜をただ一夜、春さきのをさな蛙が、聲かぎり、また聲かぎり、ここだく鳴くも。

（新選北原白秋集）

陸奥宗光
弘化元年七月、和歌山藩士伊達宗廣の第六子として生れた。伯爵、外務大臣、明治三十年八月歿。

皇上
明治天皇。四月二十三日明治二十八年。

四　三國干渉

陸奥宗光

下關條約調印の後、我が皇上は不日京都に行幸あるべき旨仰出され、廣島滯在の閣臣中御先發として京都に赴きたるものあり。時に余は養痾の爲暫く暇を賜はり、播州舞子に休沐し居たり。斯くて閣臣の四方に散居したる折柄、四月二十三日在東京露・獨・佛公使は外務省を訪うて、林外務次官に面會し、各自に本國政府の訓令を受けたりと稱し、日清講和條約中遼東半島割地の一條に關する異議を提起したり。露國公使の口述覺書は、露國皇帝陛下の政府は、日本國より清國に向つて要求したる講和條件を査閲するに、遼東半島を日本にて所有することは啻に清國首府を危うするの恐あるのみならず、是と同時に朝鮮國の獨立を有名無實となし、將來極東永久の平和に對し、障害を與ふるも

伊藤總理　伊藤博文。總理大臣。

西公使　西德次郎。

青木公使　青木周藏。

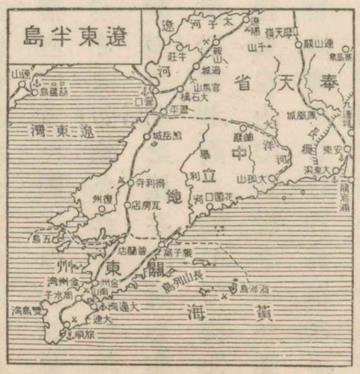
のと認む。因つて露國政府は日本皇帝陛下の政府に向つて、重ねて其の誠實なる友誼を表せんが爲、茲に日本國政府に勸告するに、遼東半島を確然領有することを放棄すべきことを以てすとあり。林次官は直ちに此の次第を余と廣島なる伊藤總理とに電稟して指揮を乞へり。

陸奥宗光

是より先き、余は在露國西公使及び在獨國青木公使の電報に據り、歐洲强國の內には、必ず下關條約に對し何事か干涉し來るべき模樣あるを察したり。因つて舞子より伊藤總理に電照し、青木・西兩公使の電報に據れば、歐洲各大國より强力の干涉來るべきは到底免れざるが如し。我が國は最初、歐洲各大國に對して我が清國に要求すべき條件を言明せざりしに由り、彼等は今日まで公然之を知るに由なく、隨つてこれに對して、故障を申出づべき機會を得ざりしなり。若し我が政府が當初に彼等に對して、我が要求條件を示したらんには、干涉は其の時起るべかりしなり。干涉既に來る、最早騎虎の勢、如何なる危險を冒すとも、卽今の位置を維持して、一步も讓らざるの決心を示す外他策なかるべし。貴大臣の意見腹藏なく示し置き下されたしと言ひ送りたるに、同日間もなく林次官の電信に接し、其の形勢の愈容易ならざるを知れり。

騎虎の勢　后使三人謂二高祖一曰、大事已然、騎虎之勢、必不レ得レ下、勉レ之、（隋書、獨孤皇后傳）

昨年　明治二十七年。



暴虎馮河
子曰、暴虎馮河死而無悔者、吾不與也（論語、述而篇）

同艦隊に對して、二十四時間内に何時にても出帆し得る準備をなし置くべき旨内命を下せりといふ噂さへあり。確報にはあらざれども頗る其の實あるものの如し。

されば、此の際に於ける我が政府の措置は、實に國家の安危榮辱の繫がる所、暴虎馮河の輕擧を戒むべきは勿論なれども、昨年以來我が海陸軍人が粉骨碎身、百戰百勝の軍功を積み、政府も亦慘憺たる苦心を重ねて、諸外國との折衝に當り、漸くにして得たる戰果は、内外人の希望に副ふことを得て、皇上の御批准さへ既に濟みたる條約の主要なる一部を烏有に歸せしむるが如き讓歩を爲すに於ては、縱令當局者たる吾儕は、國家の長計の爲に胸中無量の苦痛を忍び、將來の難局に當るを覺悟すとも、此の變報一度外間に漏るゝに至らば、我が陸海軍人の激動、我が國民の失望は如何なるべき。外來の禍機は之を輕減し得べしと雖も、内

本日
明治二十八年四月二十四日。

發の變動は之を抑制するに道なからん。

されば一應彼等の勸告を拒絕して、一面には其の底意を探り、他の一面には我が國民・軍人の意向を察するは、今日の急務なるべしと斷案を下し居たる際、伊藤總理より三國干涉の件に就いて、本日御前會議を開かるれば、意見を開申すべしとの電報あり。因つて余は直ちに昨日申進じ置きたる如く、此の際一應我が位置を維持して、一歩も讓らず、更に彼等其の後の擧動を視て、再び廟議を盡くす方然るべし。然れども事頗る重大なるが故に、露・佛・獨三國政府に對して各別に回答案を作りて、御裁決を仰ぐべし。夫迄は廟議確定なき樣願ひたしと回電したり。御前會議に於ける伊藤總理提議の要領は、（第一）縱令新に敵國を增加する不幸に遭遇すとも、此の際斷然露・獨・佛の勸告を拒絕すべきか、（第二）列國會議を招請して、遼東半島の問題を該會議に於て處理せ

しむべきか、(第三)此の際寧ろ三國の勸告を聽容し、清國に向ひて遼東半島を恩惠的に還附すべきか。この三策の中、其の一を選むべしと云ふに在り。

伊藤博文

列席の各臣は孰れも反覆丁寧に討論を盡くしたる末、伊藤總理の第一策に就いては、當時我が征清軍は全國の精鋭を悉くして遼東半島に駐屯し、我が强力の艦隊は悉く膨湖島に派出し、內國海陸軍備は殆ど空虛なるのみならず、昨年來長日月の間戰鬪を繼續したる我が艦隊は、固より人員・軍需共に既に疲勞・缺乏を告げたり。今日に於て三國聯合の海軍は勿論、露國艦隊のみと對戰すとも、勝利は甚だ覺束なき次第なり。故に第三國と和親を破り、新に敵國を加ふるが如きは斷じて得策に非ず。又第三策は寬宏の量を示すに足るが如くなれども、餘りに言ひ甲斐なき事なりとして、廟議は遂に第二策卽ち列國會議を招請して本問題を處理すべしといふに略協定し、伊藤總理は卽夜廣島を發し、翌廿五日曉天余を舞子に訪ひ、御前會議の結果を示して、余の意見を徵せられたり。

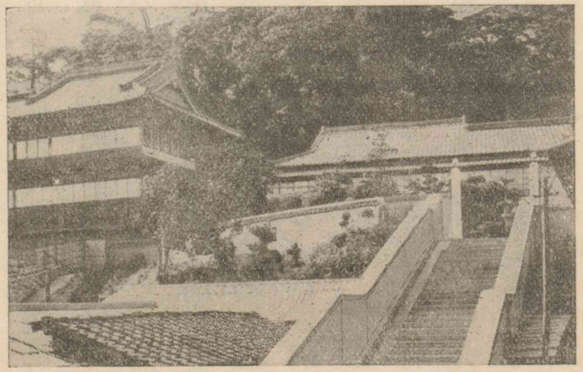
松方野村兩大臣　大藏大臣松方正義及び內務大臣野村靖。

此の時、松方・野村兩大臣も恰も京都より來會し、三大臣余が病床を繞りて鼎坐して、協議は開かれたり。余は一昨日來兩回伊藤總理に發電したる趣意を再述し、ともかくも露・獨・佛三國の勸告は一應之を拒絕して彼等の出やうを察し、彼等の底意を探りたる上にて、尙外交上一轉の策を講ずべしといひたれども、伊藤總理は其の結果如何を推究せずして、卒然三大强國の勸告を拒絕する事頗る無謀ならずや、且露國昨年以來の擧動を見るに、今

更其の底意を探る迄もなきなり。然るに、殊更に我より之を挑發して彼等に口實を與ふるは其の危險甚だ多し。危機の將に機微の際に暴發せんとするに臨みては、最早所謂外交上一轉の策も亦之を講ずるの餘地なかるべしと余の說を駁し、松方・野村の兩大臣も亦均しく伊藤總理の論旨に左袒したり。

衆論此の如くなる上は、余は自說を撤回することに吝ならざれども、列國會議招請の說には到底同意を表し難し。今茲に列國會議を招請せんとせば、露・獨・佛三國の外に少くとも尙二三大國を加へざるべからず。而して此の五六大國が所謂列國會議に參列するを承諾するや否や。縱令孰れも之を承諾したりとも、其の會議を開く迄には許多の日月を要すべし。講和條約批准交換の期日既に目前に迫りて、久しく日淸兩國を和戰未定の間に置くは徒に時局の困難を增すべし。又凡そ此の種の問題を列國會議に附すれば、列國は各〻自己の利益を主張すべきは必至の勢にして、會議の問題果して遼東半島の一事に限り得べしや。或は其の議論枝葉より枝葉を生じて、遂に下關條約の全體を破滅するに至るの恐なき能はず。是我より好んで更に歐洲大國の新干涉を導くに同じき非計なるべしと主張したるに、伊藤總理、松方・野村兩大臣も亦余の說を首肯したり。

然らば如何に此の緊急問題を處理すべきか。御前會議は既に方今の形勢新に敵國を增加するは得策に非ずと決定したる上は、露・



下關春帆樓

獨・佛三國の勸告の全部若しくは一部を承諾せざるを得ざるは自然の結果なり。而して我が國今日の位置は、目前に、露・獨・佛三國干涉の難問題を控へ居る外、尙淸國との間には和戰未定の問題を殘し居れば、若し露・獨・佛三國との交涉久しきに亙らば、淸國或は其の機に乘じて講和條約の批准を拋棄し、下關條約を故紙・空文に歸せしむるやも計られず。故に我は兩個の問題を確然分割して、彼此相關係せしめざるべき樣努力せざるべからず。即ち三國に對しては遂に全然讓步すべきも、淸國に對しては一步も讓らざるべしと決心し、此の方針を追うて一直線に進行すること目下の急務なるべしといふ結論に歸着し、野村內務大臣は即夜舞子を發して廣島に赴き、右の趣を聖聽に達し、尋いで裁可を經たり。

然れども、此の結論は今後百方計を盡くしたる上、萬々己むを得ざるに及びて、施すべき最後の策にして、五月八日即ち講和條約批准交換の期日迄は尙十有餘日を餘せば、一方に於ては三國に對して再三理を悉くし、情を述べて、其の勸告を撤回せしむるか或は之を緩和せしむるかの方策を講じ、他の一方に於ては、若し此の際他の二三大國の强援を誘引し得ば、三國の勢力を牽制して其の熱度を幾分冷却せしめ得べく、又縱令干戈相見るの不幸に陷るとも、尙我が獨力を以て危難を冒すには勝ること萬々なるべし。あらゆる計策を試みたる上に非ざれば、容易に最後の決心は發表せざるべしと協定せり。（陸奥宗光遺稿）

五　坂本龍馬

眞山靑果

眞山靑果　明治十一年九月仙臺市に生る。本名は彬。戲曲家・小說家。

一

半平太（やがて顏を上げてやゝ親しげな語調）　坂本、今日はひとつ

半平太　武市半平太。土佐の藩士、志士坂本龍馬等と討幕につとめた。

龍馬　坂本龍馬。勤王家、土佐山内侯の臣。

寛いで君の眞實の心を話してくれないか。（龍馬のコップに酒など注いで）さつきから君の話を聞いてゐると、腹は立ちながらも……又尤もと同じられる點がないでもない。或は又君の說を聞いて僕等も考へなければならない箇所もあるかと思ふ。ゆつくり話し合つて見よう。

坂本龍馬

龍馬　そりや好い。が、その前に一つ約束がある。

半平太　何だ。

龍馬　拔擊ちに切り付けられるのは御免だ。貴公はおれより業が立つてゐる。おれは自分の命ほど大事なものはない。

半平太　お主だつて……（苦笑）さつきから十分の殺氣を含んでゐるではないか。

龍馬　とにかく笑つて話せる間は笑つて聞いてくれ。出し拔けは厭だ。おれや貴樣の目を見てゐるぞ。ま、胡坐を搔けよ。

半平太　何う廻つても、素早い男だ。はゝはゝゝ。（仕方なく胡坐を組み）貴樣の議論にはいつも矛盾があると思ふんだ。

龍馬　兩端を言つては可けないのか。腹のくちい日には——食べたくない、腹のへつてゐる時は——是非頂きたい。その人にしては雙方ともに同じ眞實ではないのか。

半平太　又——。（顏を顰めて）詭辯はよせ。惡い癖だ。

龍馬　詭辯ぢやないよ。おれは議論を立てる時、いつも二つの結論の間に搖いでゐる。それが惡いのか。

半平太　（明かに舌打ちを聞かせ）才子と言はれるぞ。

龍馬　（ムツトして）才子でも好い。おれは君のやうに、昨日食は

ないと言つたから、今日腹がへつてゐても食べますとは言はれないなんて、そんな掟を立ててゐられないのだ。その時のおれを僞らぬ方が本當だと思つてゐる。君等から才子と見られても仕方がない。

半平太筆蹟

龍馬　（武市を指さし）どうもいかんな、その面付がいかんよ。

半平太　はゝはゝゝ。おれや笑つて聞くといふ約束だから喋つてゐるのだ。

半平太　さうだつたな、はゝはゝゝ。おれは全く君のために惜しむのだ。君は今のやうな議論を京都などに主張すると、血氣粗暴の輩の誤解を招いて、不慮の災難に遭はないとも限らないぞ。自重すべき時ではないか。

龍馬　現におれは、方々で威かされてゐるよ。はゝはゝゝ。

半平太　切られた上に、永久に、君の位牌の上に變節漢・裏切者、或は佐幕黨と拭ふべからざる惡名が殘るのだぞ、坂本。

龍馬　ほう――（奇異の叫聲を出し、兩手にわが頸部を抱き）厭だよ、そいつは埋らない。おれは元々佐幕論者でも何でもないんだ。そんなことで殺されてたまるもんかい。はゝはゝゝ。

半平太　併し、開國論者と云ふには差支ないだらう。

龍馬　當り前よ。今開國しないで何うする。日本全國の經濟からいつても、今は交易をひらいて、うんと金儲けをなすべき時だ。何をいつても貧乏ぢや駄目だ。金がなくては話にならない。

半平太　君の富國論は他日聞くとして、直面の問題から言へば、幕府は開國論、禁廷は攘夷說、現にその兩極端の政策をもつて、相爭うてゐる場合ではないか。君が開國說を主張すれば、勢幕府の政策をたすけることになるだらう。

龍馬　（俯向いて、眞面目に呟く）困るなあ……困る。

半平太　でも歸結はさうなるではないか。目下朝廷の思召は、八九分攘夷論に傾いてゐる大事な場合だ。僕とても無論、その攘夷が完全に實行されるか何うか、その點考へないではない。併し幕府の權威を奪つて、皇室の尊嚴を確立するには、攘夷の勅諚を奉戴して、關東政府を難路に赴かしむるが最上策だらうと思ふ。諸藩有志の輩が決然奮起したのもその意味だらう。朝廷のためには實に千載の一遇、建武の中興にも劣らぬ盛事を拜すべき、眞の機會はこの時かと思ふ。

二

龍馬　（顏を上げて）武市、もう言ふなよ。これは議論のわかれといふものぢやないだらう。人と人とが……自然に別れるところだらう。

半平太　人と人……坂本、もう少し委しく言つてくれないか。

龍馬　攘夷、勤王、同じ目的のために鄕關を捨てて、同志とともに出て來ながら、途中おれ一人だけ……同志の者にはぐれてしまつたのだ。その寂しさは……誰よりも痛切だらう。けれども、又それを、おれは何うすることも出來ないやうにも思ふ。

半平太　（膝を進め）議論の相違か、知識の相違なのか。

龍馬　さあ……。（わが心の底に答を求むる如く、深く低頭れつゝ）……さうぢやないな。もう少し深く根本に……おれは同志の者にいつもはぐれて行く素質があるのぢやないだらうか。

勝麟太郎　本名安芳。海舟と號した。明治維新に幕府の要路に在つて務めた。後樞密顧問官、伯爵。明治三十二年歿、年七十七。

（涙の溢れる目を親友に向けて）武市、おれはそれを思ふと耐らないほど、心が寂しくなるんだ。

半平太　勝麟太郎の學識に心醉し過ぎたのではないか。

龍馬　勝先生からも、おれは今……はぐれかけてゐる。

半平太　何。

龍馬　例を引いて話すと分るが、航海學を學んでゐてもさうだ。勝先生は軍するための船の運用を教へるのだが、おれの熱心はもう戰爭のための船には興奮しなくなつたのだ。おれは船を見る度に、絶えず富の運用を考へさせられる。船そのものの形を見ても、おれは何うしても戰爭といふものを考へられない。廣い人類の間に、愛情と平和とを行き渡らす……何と言ふかなあ、おれは船そのものの形から、人間の親しみだけしか感じられなくなつたのだ。

龍馬、兩手にわが頸を抱いて嗟嘆する。半平太、熱心にぢつと龍馬を見詰める。

半平太　（やがて、前のコップを取り）飲んで一つ歌つたら何うだ。

龍馬　然うだ、よさう。（聲のみ元氣よく、撥ね起きて）どれ一つ歌ふか。

半平太　飲め。（コップを渡す。）

龍馬　うむ。

龍馬、コップを出し、半平太酒器を持つ。兩人の眸思はず合ふ。互に身構ふるが如き鋭き感情露はる。

龍馬　（グッと快く三度目のコップを乾し、掌を蓋にして）武市。

半平太　何だ。

龍馬　貴公は壯年より矜恃するところ高く、一度立てたる自說は飽迄も貫徹せずにゐない男だ。おれはその不撓不屈の精

頑を羨ましく見る日もある。併し、物の姿は時とともに移りゆくのだぞ。その移りゆくものに動かぬ自分の主義を定めて、飽迄もそれを固守しようとする時、貴公、何か不安がないか。恐怖とでも云ふか……何かそれに似た感情は起らないのか。

半平太　君は僕の、頑迷固陋を笑ふのだらう……。（強ひて微笑に紛らさうとするが、顏面強直して聲をまた勵し）僕は又一定の主張を確定して、その後でなければ危くて足が踏み出せない。

龍馬　その立てた主張に、後日誤を發見した時は何うする。

半平太　その時は、不明を恥ぢる。わが愚を恥ぢる。

龍馬　責任は。

半平太　死ぬ。

龍馬　ただわが不明のため、愚しさのために死んで悔まないか。

半平太　悔まない。その不明、その愚しさは誰のものでもない、自分のものだ。

龍馬　死ぬか。

半平太　死ぬ。

半平太・龍馬、燃ゆるが如き眸に暫く睨み合ふ。

龍馬（自らその興奮に反省しつゝ、コップを疊に投げて）死ぬやつだ。貴様は死ぬやつだ……。餘りに自説を固定し過ぎてゐる。今に、二進も三進も利かない時が來るかも知れないぞ。おれに反省させるよりも、君自身も反省の必要があるぞ。

半平太　貴様に言はせると、食物が惡いのだらう。田舍鄕士だよ。

龍馬（對手の笑聲に誘はれず、沈痛に）おれは何日も、自分の議論が流動し漂うてゐなければ不安でならない。議論が一に決定し

固着する時が、最も恐ろしい時と思つてゐる。天文に見ても、地球は自らを回轉させつゝ、太陽の周圍を公轉してゐる。時候に見れば、春に向ふ冬は、三寒四溫の順序を繰返しつゝその節に進んでゐる。ものはみな流動のなかに進歩してゐる。君は勤王論も攘夷論も、只然う力攻めに、直押しに押すばかりで好いものかなあ。躓く時はないか。おれはそれを恐れる。

半平太　性分だ、仕方がないよ。

龍馬　然うだ、性分だ。

半平太・龍馬、寂しく俯向く時、突然屋外の車井戸の軌る音聞え、若侍等の賑かな笑聲聞える。

龍馬　何だ。（顏を上げ）あ、やつ等仕事から歸つて來たのか。

半平太　うん、然うらしい。若い連中の聲は賑かなものだな。

龍馬　時雨も通り過ぎたやうだ。どれ歸らうかな。

半平太　伏見までか。

龍馬　うむ。ぶら〳〵歩いて歸らう……。

龍馬寂しげに立ち上る。

——幕——（坂本龍馬）

六　四季の雨

「月の夜半こそおもふくまもなく心のそこも澄みわたりぬるものなれ。されど、闇の夜の空晴れて星の光さやかなるに、風たかく吹きかふはまた優りぬるやうに覺ゆ」といへば、「雨ぞいとまさりぬるを」といふ。「いかに」と問へば、「いでや、旱天の雨は更なり、草木の花咲き實のるも皆この惠にこそあんなれ。またその感情の深さをいはば、今日は元日なりけりといふに、雨そぼふりて霞みわたりたるは、げに春やとぞ思ふめる。師走のみそかのど

やかに降りたるも、春待顔にていとをかし。

すべて春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞み渡りて、いとこまやかに降れるが、衣濕せども降るとは見えず。」軒の玉水も間遠に音して、棲みすてし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭のおもの枯生の底に綠やゝ添ひゆくも、柳の糸の動きもやらで露そふも、ともにいと長閑なり。燈火挑げても何となく光しめりたるに、鐘の音のほのかに響き來るも、心澄みわたりぬるものぞかし。

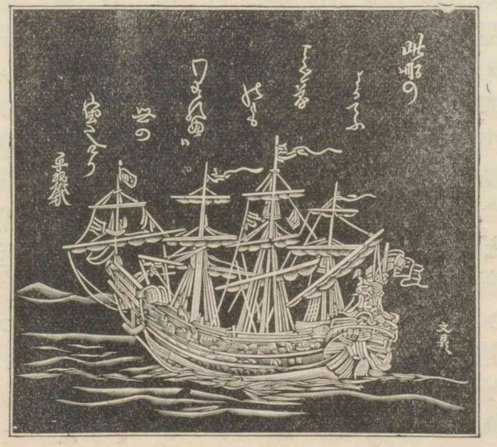
松平定信

その外、梅が香のしめり夜深くにほひわたるも、花にうしとかこちぬるも哀れはありけり。春も老いゆく頃、蛙の時得顔にすだくもをかし。

杜鵑の初音をいかにと思ふ頃、村雨のはら〳〵と降出でたるも、五月雨の幾日も降りくらして、ふみの卷々繰返しつゝゐたれば、何となく世の中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。また暑さに堪へかぬる頃、雲のみなぎり出づる勢ありて、風ひとしきり吹落ちたるに、柳・蓮葉なんどの葉裏白く見せたるも涼し。やがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後にはしきりに降り來て、物音も聞えず、土のにほひきたるもいと心地よし。軒端は玉の簾懸けたらんやうに、玉水のたえまなく落ちたるに、庭はひとつみづうみとなりて、あるは瀧おとし、または水走らせたるに、人人しばし物言はずうちまもりゐたるもをかし。やゝ雲薄くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へをどり出でて餌拾ふさまなり。はじめ雲の立出でし方は、はや空のひとしほみどりに見えて、虹なんど見ゆるに、木々のみどりの庭潦（にはたづみ）に

かげ見ゆるもいとすずし。老いたる女などかみの音におどろきて這出でたるが、『今日のは若かりし時のごとよく霽れにけり。今時のはかく霽るゝこと稀なり。』なんどはや繰言いふもあり。『彼はかくあわてき』などいひて、かたみに笑ひどよみつゝ、『今日は蚊も少かるべし。かみの音もいとかすかなり。この頃の暑さも忘れぬ。』とて端近う出づれば、夕月の光さしわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の物待顔に空うちにらみて、ふつゝかなる音に鳴くもをかし。

筆蹟
（畫は谷文晁）
この船のよるてふことを夢の間も忘れぬは世の寶也けり



定信筆蹟

秋くる頃の雨は昨日にかはりて何となう淋し。萩の上風、外山の鹿の音なんど、月よりも身に沁む心地ぞする。常は聞きなれし筧の水の音までもあはれ深くこそ。……月の前の村雨もまたをかし。まいて、やゝ夜寒の頃、鳴きからしたる虫の音の、雨のをやみにかすかなる聲して、枕ちかく鳴き寄るも哀れなり。『この雨に木々も染めなん。』と思へば、『茸なども生ひいでなん。栗もはや落つべし。』などと、わらはべの物淋しげに燈火に向ひつゝ言ひいづるもげにさまざまなり。夜深き鐘の音のうちしめるものから、さすがに秋は聲冴えて聞ゆるにぞ、鐘撞く人の心をもあはれと思ふばかり、感情はいと深かりけり。紅葉の染めそふも、白菊の移りゆきてひとさかり見するも、尾花の露重げにうちしをれたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりもつきづきし。朝顔の皆枯れたる中に、さゝやかに赤う咲出でたるが晝過ぐるま

花月草紙　六卷、百五十六編より成る。定信の和文の隨筆

山路愛山　元治元年靜岡縣沼津に生る、本名彌吉、明治より大正に亘る評論家、大正六年歿、年五十四。

で周みおくれたる、またあはれなり。野分の風はおどろおどろしきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがに哀れを添ふるは秋のならひなるべし。時雨のさと音して夕日に白く降り來るも、また音かへて枕とふもをかし。月よりも闇の夜よりも哀れ深きものには侍らずや」といへば、「かうやうにいひならべては、げにもといふべからんが、一年も降る心地してよみ見れば、この雨はをとつ日より降り出でしをと思ふ心は變らじ」と、心の中に思ひて聞きゐしも、またをかしかりけり。（花月草紙）

七　旅行

山路愛山

風水相擊ちて波を爲す。孤掌の鳴らし難きが如く、感興は書齋の閑居に生ずるものに非ず。我をして自ら進んで自然の中に住せしめよ、自然も亦旋りて我の中に住むべきなり。我動け

秋風白河の關を詠みたる人　都をば霞と共にたちしかど秋風ぞ吹く白河の關（後拾遺集卷九）と詠じた能因法師。

ば自然も亦動く。我の中に在る天才は、自然の光景に觸れて始めて感興涌出す。昔は一室に坐して秋風白河の關を詠じたる人もあり、坐ながらにして名所を知れる歌人もありき。而も是自然の神髓に達すべき道には非ず。自然は唯質問を發するものにのみ答辯を與へ、來りて見るものにのみ教訓を與ふるものなり。

試みに、千山萬水を跋渉し、而して後、首を回らして故郷を見よ。如何なる感情の此の間に生ずべきか。幼時より爛熟したる某山某水は始めて遙なる天に輝ける星の下の物となるに非ずや。心なくして飛ぶ雲も、夕日も、波濤も、人をして故郷を聯想せしむる媒介となるに非ずや。無趣味なる青空も、故郷の方の天としいへば、大いに詩趣を生ずるに非ずや。人自ら廻轉して自然も亦其の態を變ず。昨日天邊の寸碧は今朝杖底の千岩なり。今

朝杖底の千岩は卽ち明日亦天邊の寸碧なり。甕中に在る者は甕の大小を知らず。身を轉じて甕外に在りて、始めて甕の全形を知る。故郷を離れて故郷の懷かしきを知る。故郷の懷かしさは現在の自己より過去の自己を眺むる感興なり。

我は嘗て蜻蜓を釣らんとして野外に遊びたる小兒なりき。溪流に網を投じて魚を捕へたる頑童なりき。其の岸に垂れたる楊柳、其の野に咲きたる杜鵑花、我は毫も其の奇なるを感ぜざりき。然れども我は故郷を去りて天涯の遊子となれり。位置と境遇とを異にせる我は、始めて過去の位置と境遇とに在りし我を客觀的に見ることを得たり。而して嘗て我を圍みて而も我に感興を與へざりし自然は、始めて我をして涙を零さしむるものとなれり。是、旅行が吾人に與ふる詩趣の中に於て最も味あるものに非ずや。

山重水複の詩　宋の陸游（放翁と號す）の作。

パノラマ　panorama

舟に棹さして長き川を下れば、四山の面目畫屏の如く、時若し夏の初ならば、杜鵑花・霧島、紅の雨を降らし、時もし秋ならば、兩岸の蘆荻、風に鳴る。時々刻々に變化する光景に、人は知らず覺えず吸引せらるゝなり。前面に鬱々たる山あり、舵師棹を暗中に揮ふ。前途既に窮するが如し。忽ちにして山廻り、天濶く、雞犬聲あり、田畝開け、桃源一村、人をして世界の霽明を歌はしむるものあり。「山重水複疑無路、柳暗花明又一村」。此の時此の情果して如何ぞや。或は天寒くして毛氈に身を包み、柔櫓の聲に眠を催しながら、覺むるが如く眠るが如く、有るが如く、無きが如き間に於て、須臾に變じ行く兩岸のパノラマを樂しむが如き、如何に沒風流の徒と雖も、終に黃金以外眞の娛樂あること、を知るに至るべきなり。

朝まだき旅立すれば、駒の歩に連れて茅屋の軒も動き、絲の如

くなる炊煙後に靄き、淸爽の氣身を襲ひ、殘月彼方の山の端にかかり、村里は靄の中に在りて覺めず、歩々光と暗とが地歩を爭ふが如き、又微雨の蕭々たるに歴史ある古寺を訪へば、蝸牛壁に紋を畫きて自ら多年風雨の侵蝕せるを示したる、若しくは夕陽に馬を下りて古英雄の廟を弔へば、

夏草やつはものどもが夢のあと。

何とも名狀すべからざる幽懷を生ずるが如き、是皆旅行

旅人（野田九浦筆）

夏草や云々
松尾芭蕉の句。

羽蟻飛ぶやの句
蕪村の句

に非ずんば得べからざるものにあらずや。

羽蟻飛ぶや、富士の裾野の小家より。

一面の平湖鏡の如き浮島ケ原、其の南を縫へる松林の東海道、總て是一幅の畫圖なり。春天穩かにして富士嵐到らず、空氣はさざなみだになき水に似たり。忽ち見る羽蟻の飛ぶを。靜中纔に動あり、駘蕩の春色寫し得て眞に迫る。此豈一室に坐して瞑想する者の解し得る所ならんや。

旅行の妙趣は登臨を以て最も大なりとす。青竹を杖づきて五千尺以上の高山に上り、而して下界を見よ。數個の山脈は蛇の如く邑を圍み、州を隔てて、營々たる人間恰も蟻垤の如くに見ゆるのみならず、造化の大經濟も亦雙眸の外に漏れず、山河の配置自ら天命を示せり。乾坤大なりといへども、悟了すれば浮動の原素に過ぎず。原子（アトム）と原子（アトム）と相擊ち相觸れ、紛糾錯綜したる

アトム
atom

劉　劉備。支那三國時代の蜀の主、諸葛亮の言葉を用ひ天下三分の計を定め、遂に帝號を稱した、昭烈皇帝。成都に都し、在位三年にて崩じた。

項　項羽。漢の高祖と覇を爭ひ、垓下に敗れ、烏江に敗死した。

シーザー　Caesar　羅馬を支配した政治家、紀元前四十四年歿。

東坡　蘇軾の號。

混沌の狀態たるに過ぎず。劉は起りたり、項は亡びたり、シーザーは生れて死したり、帝國も覇圖も俯視すれば唯一氣のみ。東坡の「山川與城郭漠々同一形。市人與鴉鵲浩々同一聲」と歌へるは眞なり。故に山に上るは一の哲學なり、高山の絶頂に坐するものは卽ち哲學の講壇に坐する者なり。

人は永久無限を慕ふ者なり。人の此の世に於ける境界は有限なり。然れども彼は無限の中に姙まれたる者なるが故に、無限は其の欲望なり。雲雀よりも高き峠に息らひて身を雲の中の人となし、世界の彼方より此方に旅行する鳥の行方を眺むれば、無限の渴望を慰せらるゝことなきを得ず。白雲のたなびく山のあなたにも國あり、遙なる嶺の外にも鳥の住むべき里あり。

天つ雲ひとつに見ゆるこしの海の
浪をわけてもかへるかりがね。

天靑くして雨は雁の背より霽れたり。自然の家には住むべき舍多きかな。人間豈塵界の爲に繩せらるべけんや。此の意義に於て自然は人をして無限ならしむるものなり。是、旅行より學び得たる自然の教訓に非ずや。（愛山文集）

八　落花の雪

俊基朝臣は先年土岐十郎賴貞が討たれし後召捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、樣々に陳じ申されし趣、げにもと赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、專ら隱謀の企かの朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に又六波羅へ召捕られて關東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずるとも許されじ、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひまうけてぞ出でられける。

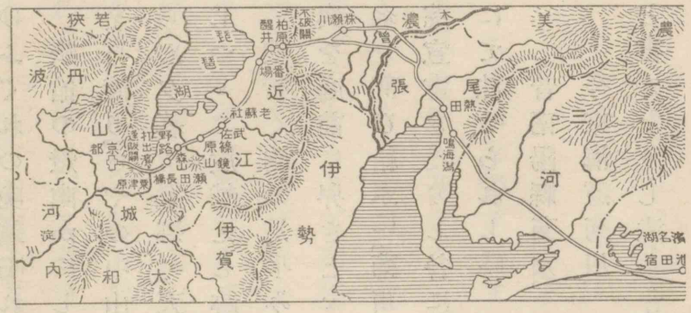
交野　河内國。
嵐山　山城國。朝まだき嵐の山の寒ければ、紅葉の錦着ぬ人ぞなき（拾遺集）

逢坂の關　近江國。逢坂の關の清水に影見えて今や引くらむ望月の駒（拾遺集）

落花の雪に踏迷ふ交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る嵐の山の秋の暮、一夜をあかす程だにも旅寢となれば物うきに、恩愛の契淺からぬわが故郷の妻子をば行方も知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし九重の帝都をば今を限と顧みて、思はぬ旅に出で給ふ心の中ぞあはれなる。

憂きをばとめぬ逢坂の關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱。沖を遙かに見渡せば、しほならぬ海にこがれ行くみをうき船の浮き沈み。駒もとゞろと踏みならす勢多の長橋打渡り、行きかふ人にあふみぢや、世をうねの野に鳴く田鶴も子を思ふ

不破の關　美濃國不破郡に在る、三關の一。



かとあはれなり。時雨もいたくもり山の木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず。物を思へば夜の間にもおいそのもりの下草に、駒を留めて顧みる故郷を雲や隔つらん。

番場醒ケ井・柏原。不破の關屋は荒れはてて、猶もるものは秋の雨。いつかわがみのをはりなる熱田の八劍ふし拜み、汐干に今やなるみがた。傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の末は何處ととほたふみ、濱名の橋の夕汐に引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれと

さやの中山
遠江小笠郡、日坂村と菊川との間にある山路。歌枕。

命なりけり
年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山（新古今集）

隙行く駒
人生二天地之間一、若二白駒之過ヒ隙。（莊子）

宗行卿
中御門中納言藤原宗行。

ゆふぐれの晩鐘鳴れば、今はとて池田の宿に着き給ふ。

旅館の燈幽かにして雞鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて天龍川を打渡り、さやの中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり。」と詠じつゝ二度越えし跡までも羨ましくぞ思はれける。

隙行く駒の足早み、日已に亭午にのぼれば、餉進らする程とて輿を庭前に舁きとゞむ。轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎に因りて、宗行卿關東へ召下されしが此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水、　汲二下流一而延齡、
今東海道菊川、　宿二西岸一而終命。

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、あはれや

業平
在原業平、世に在五中將、又は在中將と稱ふ。平城帝の御子阿保親王の五子。歌人。

夢にも人に
駿河なる宇津の山邊のうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり。（伊勢物語）

上なきおもひ
富士の嶽の煙はなほぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり（新古今集）

いとゞまさりけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川の、
おなじながれに身をやしづめん。

大井川を過ぎたまへば、都にありし名を聞きて龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鷁首の船に乘り、詩歌管絃の宴に侍りしことも今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。島田・藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛末枯れて物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、蔦かづらいと茂りて道もなし。昔業平の中將の、住む所を覓むとて、東の方に下るとて、「夢にも人に逢はぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見潟を過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守にいとゞ涙を催され、向ふはいづこみほが崎。興津・蒲原打過ぎて富士の高嶺を見たまへば、雪の中より立つ煙、上なきおもひに比べつゝ、明くる霞

に松見えて浮島が原を過行けば、汐干や淺き、船浮きておりたつ田子のみづからも浮世をめぐる車返。竹の下道行きなやむ足柄山の峠より大磯、小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着きたまひけれ。

其の日やがて南條左衞門高直請取り奉りて、諏訪左衞門に預けらる。一間なる處に蜘手きびしく結うて押籠め奉るありさま、只地獄の罪人の十王の廳に渡されて、頸枷手枉を入れられ、罪の輕重を糺すらんもかくやと思ひ知られたり。（太平記）

太平記　四十卷、作者不詳、花園天皇の文保二年より後村上天皇の正平二十二年に至る凡そ五十年間の戰亂を記した書。

九　自由創造の精神

田澤義鋪

わが國民性には、長所のどこまでも維持すべきものが少くないが、又短所の、如何にしても改めなければならないものもある。

田澤義鋪　明治十八年生。佐賀縣の人、現日本青年館常任理事。

長所の隨一は、國家が一大事に遭遇すると、一道の靈光が、胸より胸に傳はつて、國民は悉く共通の感激に燃えたつことである。次は一度意氣に感ずれば、成敗を論ぜず、利害の打算を超越して、情誼に殉じて悔いざることである。又簡素の趣味を愛し、物質的慾望に、比較的淡泊であり得るが如きも、亦たしかにわが國民性の長所の一つであらう。

一面にかうした長所を有するが、又他面には大なる短所を有することを忘れてはならない。その最も大なるものとして、私は、自由創造の精神に乏しく、從つて摸倣追隨を事とし、雷同附和に陷り易い一事を擧げたいと思ふ。歴史を見ても、現狀を見ても、私はかく斷言せざるを得ないことを悲しむものである。我が文化は曾て印度に學び、支那に倣ひ、或は歐米を摸したもので、何としても民族の自由創造の所産ではなかつた。特殊な國體、

敬神崇祖の大道、祝詞・和歌・俳句、上代に於ける氏族制度、鎌倉時代の武家政治、德川時代の封建制度等には、全く固有なものもあり、又摸倣であるといひ難いものもあるが、大體に於て、わが國の文明は摸倣の要素を多く含んでゐるといへる。

明治維新の大業は、神武創業の精神に則つたものと言はれる。その氣魄の雄渾にして、志操の壯烈なるものはあつたが、新な光彩を持つた歐洲文化に接し、加ふるに條約改正の大業を控へてゐたので、先づ泰西諸國の摸倣を急務として、自由創造の風を振起すべき機會と環境とを與へられなかつたのである。さうして明治時代には、幾多の驚くべき業績があるに拘らず、摸倣追隨の國民性の缺陷も益〻その大を加ふるに至つたのである。かかる情勢に對し、成るべく速に一轉機を劃さなければならぬと言ふことは、識者の夙に叫んだ處ではあるが、事實は容易に行はるに至らなかつた。かの條約改正が、國民の多大な犧牲によつて成し遂げられた時こそは、たしかにこれをなすべき最初の好機であつた。併し既に日露戰爭の危機が孕まれてゐた時であつたので、これを實現することは無理であつた。日露戰爭の終結後は第二の好機であつたが、この時も多年の惰力、遂に空しく機會を逸してしまつた。

歐洲戰後數年を經て、歐洲文明の行詰りが、批評家の論議に上ることの多くなつた今日こそ、遲れたりと雖も、自由創造の大精神を鼓舞作興すべき機運の、彌〻動き出した時であると言はねばならぬ。然も我が陛下は、登極の初に、「摸擬を戒め創造を勗め」と教を垂れさせられてゐる。苟も國民たる者、正に大に力をここに致すべきであらう。

されば、自由創造の大精神を喚起するには、如何なる方法を取

ればよいか。これは眞に重大な問題である。かくの如き國民性に關する大問題は一二の特別の方法によつて奇効を奏し得べきものではない。政治と言はず、教育と言はず、經濟と言はず、あらゆる方面に於て、不必要な統一束縛を撤廢し、國民をして、附和雷同の陋習を脱せしめ、各〻その個性に基づき、自由にその天分を全うせしめ、自己の尊嚴に目覺めさせなければならぬ。而して自由な研究、獨創の美風を作興するがために、一切の方法を講じなければならない。そして、それと同時に個人主義の放縱に墮して國家社會を念としないやうになることのないやうに、細心の注意を要する。即ち初にいつた國民的感激性の長所を大いに發揮し、更に我等の尊ぶべき個人は社會生活、國家生活の基礎の上に立てる個人であり、重んずべき個性は普遍性の基礎の上に立てる個性であることを明かに知り、我等の人生は、單なる個體を以て最後の存在とせる個在分立の人生にあらず、始なき始より、終なき終まで、永遠に生命を有し、而も一切を包括せる全一の大人生であることを會得し、我等の個體乃至個性は、實にこの全一の大人生の表現で、その全一の基礎を忘れずに、之を充實發展せしむることこそ、全一の進展を見る所以であるといふ理解を十分にして進まねばならぬ。かくて始めて國家社會を熱愛しつゝ、自由創造の大精神を發見することが出來るであらう。

（道の國日本の完成）

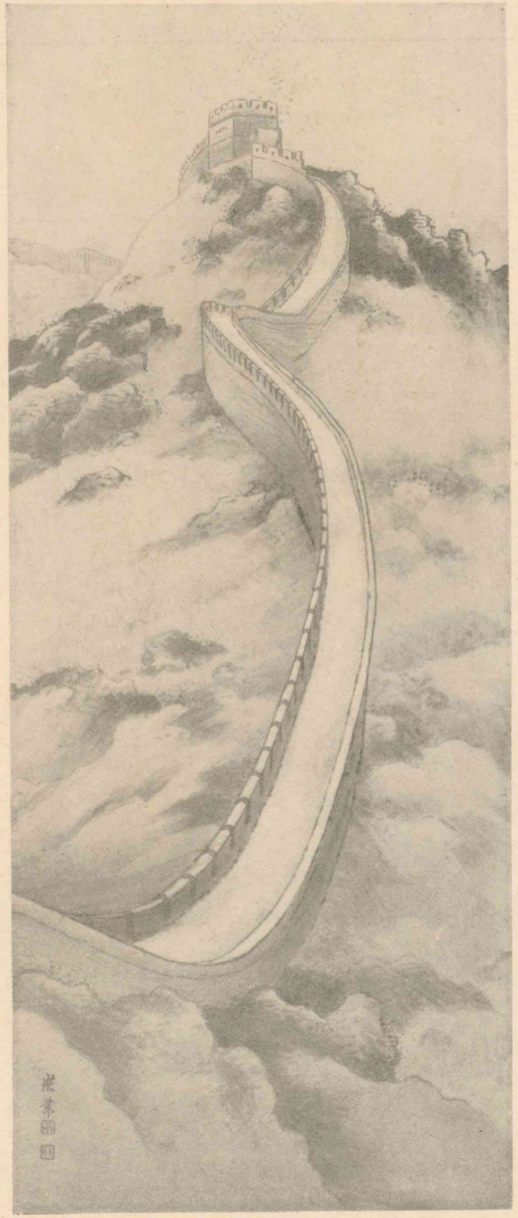
10　萬里の長城

土井晩翠

土井晩翠　名は林吉、仙臺の人、明治四年生、英文學者、詩人。

一

生ける歴史か、積り來し齡は高し二千年。
影は萬里の空に入る、名も長城の壁の上、



長城の夕　寺崎廣業筆

落日低く雲淡く、關山みす〳〵暮の色。
征馬恨みて留りて、遊子俯仰の影長く。

絶域花は稀ながら、平蕪の綠今深し。
春乾坤に回りては、空悉く霞み行く。
天地の色は老いずして、人間の世は移ろふを、
歌ふか高く大空に、姿は見えぬ夕雲雀。

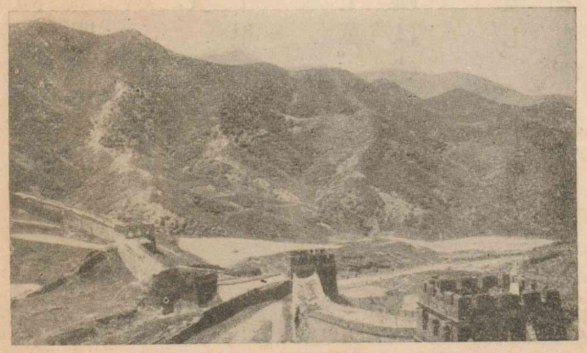
嗚呼跡舊りぬ、人去りぬ、歲は流れぬ。千載の
昔に返り、何の地か今秦皇の覇圖を見ん。
殘壘破壁聲も無し。恨も暗し、夕ぐれの、
春朦朧のただなかに、俯仰の遊子影一つ。

二

秦皇
秦の始皇帝。

三皇五帝
三皇は、伏羲・神農・黄帝。
五帝は、黄帝・顓頊・高辛・唐・虞。
六王
支那春秋戰國時代の六國の王。

三皇五帝あと遠く、六王畢りて四海一。
四海の黔首ひれふして、雷霆の威に聲もなし。
「わが宮殿を高うせよ」。一たび呼べば阿房宮。
「わが邊境を固うせよ」。二たび呼べば萬里城、
春は驪山の花深く、秋は上都の雲暗く。
管絃の音雲に入る、舞殿の春の夕まぐれ、
袂を擧げて輕く起つ、三千の宮女花のごと、



萬里の長城　（そのー）

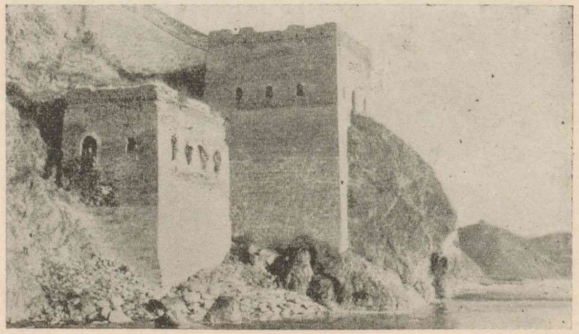
花を散らして玉觥に浮かす歌扇の風もよし。
彫龍の欄奥深く薫る蘭麝の香を高み、
珠簾を洩るゝ銀燭の光殘りて夜や明けん。

西臨洮の嶺高し、ここ遼東の谿深し。
流を埋め、山を截り、壘を連ぬる幾千里。
籌の焔天を燒き、劍の光霜凝りて
殺氣夏猶もの凄く、守るは猛士二十萬。
漠のこなたに胡笳絶えて、匈奴の跡は遠ざかる。

三

「北夷の憂絶えはてて境は堅し國安し。
先王の書も焚け果てぬ、天下の儒者も埋りぬ、
わが萬世の業成りぬ。」君王の思しかなりや。

知るや夜半の阿房宮、後庭深く森
暗く、
歌臺の響よそにして、ひとり嵐の
つぶやくを、
「浮世の花の一盛り、褪むるに早き
色見ずや。」
聞け、長城の秋の營、旌旗の暗に消
ゆる時、
またゝく光露帶びて、星の竊にさ
さやくを。
「富も力も一場の夢覺め果てん後
思へ。」



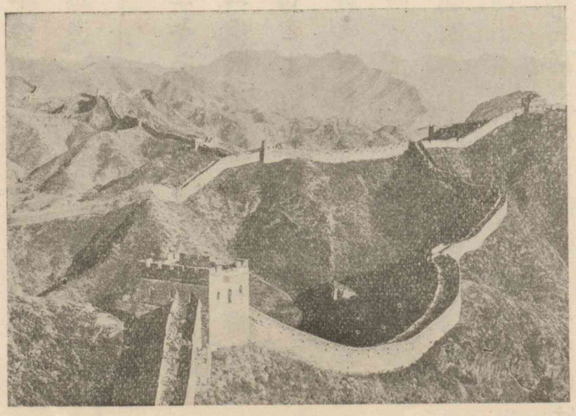
萬里の長城　（その二）

沆瀣　露の氣味。露。

四

春靜かなる東海の綠を涵す波の上、
不死の金闕遠くして、童女五百の舟いづこ。
絳霞の光、天上の花とこしへに匂へども、
土に下れば沆瀣の示すはひとり世の脆さ。
至尊の榮は高くとも、名を玉籍に留め得じ。
金人十二鑄なせども、かれに無象の劍あり。
心を焦し身を碎く、あゝ韓朝の一孤臣、
爾の策は成らずとも、無常の風は荒かりき。
天地靜かに夜更けて、江流秋に咽ぶ時、
ひとり地橋のかたほとり、燃ゆる心も鎭まりて、
思ふやいかに、人力の脆さを、命の定りを。

鐵椎血無し博浪沙、鮑魚臭有り沙丘臺。
嗚呼死屍未だ冷えずして、
かれ「萬世の業」いづこ。
暗君嗣ぎて上に在り、
佞竪の害よなどあらき。
民の怒は火の如く、
戍卒は叫び兵は起ち、
楚人の一炬閃きて、
咸陽の宮皆焦土。
霽れざる空に虹懸けし、
復道の跡今いづれ、



萬里の長城　（その三）

雲あらざるに龍飛べる、長橋の影はたいかに。
衰蘭露に悲めば、遺宮空しく草の宿、
驪山の麓春去れば、花悉く涙なり。
斬蛇の劍炎情の光もさはれ極みあり。
甘泉殿の夜半の月、かれも浮雲の恨あり。
その移り行く世の習、二京の花をよそにして、
邊土に立てる長城の連雲の影あゝ絶えず。

（曉鐘）

二　新島守

いつの年よりも五月雨霽間なくて、富士川・天龍などえもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻めのぼる武者どももあやしく艱めり。かかれども遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出立つ。其の勢六萬餘騎とかや。宇治・瀬田へ分ち遣はす。世の中ひびきのゝしるさま、言の葉も及ばず、まねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落下り、すべて安げなく騷ぎみちたり。いかがあらんと、君も御心亂れておぼし惑ふ。豫ては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわただしく、色を失ひたる樣ども頼もしげなし。

六月二十日餘りにや、いくばくの戰だになくて、遂に御方の軍敗れぬ。荒磯に、高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあきれて、上下ただ物にぞ當り惑ふ。あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍計らひおきてつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院・宮々、處々におぼし惑ふこと更なり。本院は隱岐の國にお

六月二十日　承久三年。
泰時　北條義時の長男
時房　義時の弟。
保元の例　保元の亂後、崇德院を讃岐へ遷し奉つた例。
院の上　後鳥羽院。
女院　七條院・承明門院・修明門院等をさす。

鳥羽殿　山城國紀伊郡にあつた離宮。

ものにもがなや　とりかへすものにもがなや世の中をありしながらの我身と思はむ（源氏物語・帚木卷）

信實　藤原隆信の子、出家して寂西と號した。父子共に肖像畫の名人。

七條院　藤原信隆の女。後鳥羽天皇の御生母。

新院　順德院。

帝　仲恭天皇。

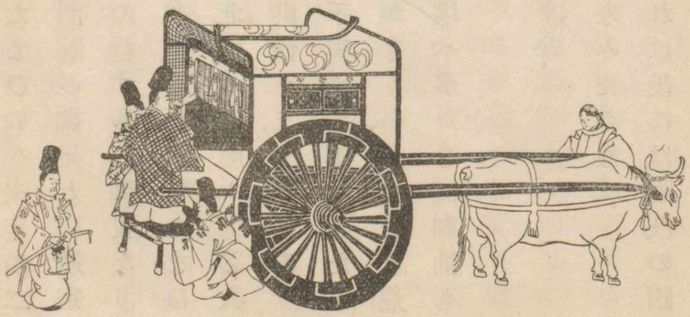
はしますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせたまふ。今日を限の御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや」とおぼさるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせたまふらん。まだいとほしかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はんとなり。」かくて同じき十三日に御船に奉りて、遙なる波路をしのぎおはします御心ち、この世の同じ御身ともおぼされず、いみじう、いかなりける世の報にかとうらめし。新院も佐渡の國に遷らせ給ふ。まことや七月九日、帝をもおろし奉りき。この四月かとよ、御讓

後鳥羽院宸影

中院　土御門院。

位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にておりたまへるためしも、これや始なるらん。

さて上達部・殿上人、それより下、はた殘りなく、この事に觸れにし類は、重く輕く、罪に當る樣いみじげなり。中院は初よりしろしめさぬ事なれば、東にも咎め申さねど、父の院遙に遷らせ給ひぬるに、のどかにて都にあらん事いと恐あり」とおぼされて、御心もて、その年閏十月十



網代車

若宮　後嵯峨天皇。

承明門院　土御門院の御生母。御名は在子

宸筆　磯馴てしのふや如何難波人まろやにかゝる夕浪の聲。

日、土佐の國の幡多といふ處に渡らせたまひぬ。去年の二月ばかりにや若宮いできたまへり。承明門院の御兄人に、通宗の宰相中將とて、若くて失せたまひにし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家に留め奉りたまひて、近く侍ひける北面の下臈一人、召次などばかりぞ御供仕うまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせたまふ。道すがら雪かきくらし、風吹き荒れ、吹雪して、來しかた往く先も見えず、いと堪へがたきに御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かるに、

磯馴てしのふやなに難波人まろやにかゝる夕浪乃聲

後鳥羽院宸筆

○うき世にはかかれとてこそ生れけめ、

ことわり知らぬわがなみだかな。

「せめて近き程に」と東より奏したりければ、後には阿波の國に遷らせたまひにき。

津の國のこやの云々　津の國のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ葦の八重葺。（後拾遺集）

六つにて位に即きたまひて、十三年おはしましき。下りたまひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じことなりしかば、すべて三十六年が程この國のあるじとして萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を從へたまへりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりもまされる御有樣にて、遠きをあはれみ、近きを撫でたまふ御惠雨の脚よりもしげければ津の國のこやのひまなき政を聞しめすにも、難波の葦の亂れざらんことをおぼしき。藐姑射の山の峰の松も、やうやう枝をつらねて千代に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を經ても空ゆく月日の限知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありくてよしなきひとふしに、今はかく花の都をさへたち別れ、おのがちりぢりにさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからこととふも

のとては、浦に釣する海士小舟、鹽やく煙の靡く方をも、わが故郷のしるべかとばかりながめすごさせたまふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらんだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいて何時を果とか廻り逢ふべき限だになく、雲の波、煙の波の幾重とも知らぬ境に世を盡くし給ふべき御樣ども、くちをしともおろかなり。

黒木行在所址

このおはします處は、人ばなれ里遠き島の中なり。海づらよりは少し引入りて、山陰にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかり、ことそぎたり。誠に「柴の庵のただしばし」とかりそめに見えたる御宿りなれど、さるかたになまめかしく、故づきてしなさせたまへり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになん。はるばると見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今更めきたり。潮風のいとこちたく吹き來るを聞しめして、

われこそは新島守よ、おきの海の
あらき波風こゝろして吹け。」（增鏡）

柴の庵のただしばし
いづくにも住まれずばただ住まであらむ柴の庵のしばしなる世に（新古今集）

水無瀬殿　攝津國三島郡にあつた離宮。

增鏡　治承四年後鳥羽天皇の御生誕より元弘三年後醍醐天皇が御還幸まで凡そ百五十年間の歴史物語。作者不詳。

松浦一　東京の人。文學者。前東京帝國大學講師。

一茶　姓は小林、通稱は彌太郎、寶暦十三年信濃國上水内郡柏原驛に生れた。俳人、文政十年十一月歿した。年六十五。

一三　一茶の俳句

松浦一

我が非運と外物への同情とで、終生涙の中に煩はしき浮世の實を洗ひ落して居た一茶は輕妙と沈痛とを結び付けて古今獨歩の感がある。

やよ虱這へ這へ春の行く方へ。

やれ打つな蠅が手をする足をする。
寢がへりをするぞ其處のけきりぎりす。
泣くなとて母の踊るや門の月。

小林一茶

おれと來てあそべや親のない雀。
門かすぞ啼かずに遊べ雀の子。
痩蛙負けるな一茶是にあり。

筆蹟
蛙たゝかひ
痩かえるまけるな
一茶是に有
俳諧寺

小林一茶筆蹟

米まくも罪ぞよ雞が蹴合ふぞよ。
雀の子そこのけそこのけ御馬が通る。
杵先や頭あぶない雀の子。
人中を猫も子ゆゑにぬすみ哉。
我が袖を親とたのむか逃げ螢。
魚どもや桶とも知らで門すずみ。
我が宿は何もないぞ巣立鳥。
あはれ蚊のから戻りする夜明哉。
我が味の石榴に這はす虱かな。
蚤どもに松島見せて放ちけり。

逃るなり紙魚が中にも親よ子よ。

菊の花都の鬼がこれを食ふ。

人聲に子を引きかくす女鹿哉。

殺されにことしも來たよ小田の雁。

喧嘩すな相見互の渡鳥。

冬の蠅逃せば猫にとられけり。

人來たら蛙になれよ冷し瓜。

筆蹟
姨捨などゝは老足むづかしく。
有合の山ですますやけふの月　一茶

小林一茶筆蹟

此等の句を靜かに誦めば、輕い涙が催される。私は餘程前滑稽俳句集」といふ小册子を見た時に、「やれ打つな蠅が手をする足

をする」の句を其の中で見まして、是が譯もなく滑稽と見られて居ることを淺ましく思つたことがあつた。併し又一方から考へれば、此程深刻な同情の表現を滑稽と見ることが出來る程、此の句は洒脫なものである。而して此處に數多擧げた句の樣なものは、皆同一種類のものである。人に涙を催させる此の力は、勿論作家の僞りなき大なる同情の然らしむる處であるが、其が飄々乎として情に破れず、何處までも澁滯のない輕妙な形で淡くあらはれてゐるのは、其の實が虛から出たためである。若しこれが逆に實から出た虛であるとしたならば、どうであらうか。同情の實を稀薄にするといふだけの意味になつてしまふ。情を淡く現すと云つたのは、稀薄にして現すといふ意味ではない。例へば、唯水へ投げ込めば其の重さで沈むものも、油を浮かべた水面では輕々と浮かぶことがある。淡く現すと云ふ事は卽ち

油を流した水面に輕々と浮べることを云ふ。稀薄にすると云ふ事は、其の物の水に沈まぬ程度に薄く削ることを云ふのである。

（文學の本質）

稲畑勝太郎　實業家。大阪商工會議所會頭。貴族院議員

ヴァチカン　羅馬法王の宮殿。

サンピエトロ　羅馬法王の寺。一五〇三年以後ユリウス二世の頃、建築家ブラマンテやミケランジェロ等に改築せしめて一六一二年に完成した。

オベリスク　obelisk

ドーム　dome

カトリック　Catholic

一三　ヴァチカン宮殿

稲畑勝太郎

私達は今、千有餘年の古き歴史を有し、今も尚全世界の三億の信徒を支配する靈の殿堂ヴァチカンを訪はんとするのである。

自動車は爪先上りの大道を、サンピエトロ寺に向つて走る。間もなく目の前に、圓形の大廣場が展開する。廣場の中央に、巨人のやうに突つ立つた尖塔（オベリスク）が見える。そのオベリスクの向ふに聳ゆる大圓蓋（ドーム）こそ、カトリック教の本山、サンピエトロ寺院である。ヴァチカン宮殿は、サンピエトロ寺に向つて右側にある。廣場を通り、オベリスクと噴水との間を過ぎて、正門前で車を乘り棄てる。

ラファエロ　Raphael（1483—1520）伊太利の名畫家。

ナポレオン　Napoleon

正門を入ると、その兩傍には、畫聖ラファエロの意匠になるといふ赤黄の筋の入つた美服を纒ひ、ナポレオン帽をいただき、手に劍槍を持つた數人の番兵が立つてゐる。私達は先づこゝで、中世紀の夢の國へ來たやうな心持にさせられる。

受付に來意を告げると、間もなく、黒の軍服を着け、

モザイック mosaic 剪候細工。
ミッショナリー missionary 宣教師。

胸間に勳章を吊した正裝の武官が出て來て、敬しく先に立つて案内する。途中番兵の警衛する幾重かの門を過ぎ、天井の高い美しい大理石を敷きつめた、モザイックや壁畫で飾つた幾つかの華麗な室を通り拔ける。どの室にも、金色燦然たる軍服の武官が詰めて居り、拜謁者が充滿してゐる。拜謁者のうちには、世界各國の信徒代表の男女、遠い國から來た法王廳のミッショナリーらしい老若の僧侶尼僧なども見えた。この多勢の拜謁者を、武官が整理して、次へ次へと進ませるのだから、なか〳〵時間がかゝる。

謁見は、大體二樣に區別されてゐる。普通は、サンピエトロ寺院の大廣間で、數千人數萬人が一團となつて、同時に法王から謁を賜はるのである。この時には、武官數人がかりで、法王の腰かけたまゝの椅子をかついで、信徒の整列してゐる中を、靜々と練つて廻るので、信徒は法王が自分の前を通る時、跪づいて禮拜する。法王は手をあげて信徒達を祝福して過ぎるのである。

特別謁見者は、宮殿の小謁見室で拜謁を許されるので、この時には、一段高い壇上に法王の玉座があつて、拜謁者はその前に跪づく。法服を着たものは兩膝をつき、俗服のものは片膝をついて、法王の手を押しいただき、その手に接吻するのである。この儀式は、如何なる高位高官の人でも、從はねばならないものである。

併し、私は法王の特別の思召によつて、破格の優遇で法王の書齋に通され、椅子を與へられて法王と對坐した。私は靈の國の主權者である法王が、而も數百人の特別拜謁者の詰めかけてゐる中を、私のために特に席を設けられた寬容と好意とに對してひたすら感謝の念を禁じ得なかつた。

私は今、全世界に於けるカトリック教徒の崇拜の中心である羅馬法王と相對してゐるのである。

神々しい老軀を、清淨の象徴である白衣白帽につゝみ、燃えるやうな深紅の履をはいた、圓頭豐頰、さながら春風の吹き滿つるやうな溫顏の持主、これがローマ法王パイアス十一世である。

ローマ法王

ただ相對坐しただけで、私の心は感激に躍る。

法王は眼鏡越しに、優しみの滿ちた眼元に微笑をたゝへつゝ、低音の、しかも力のこもつた聲で問はれる。

「今上陛下の御健康は、近頃如何に渡らせられますか。」

私は、法王の第一問が、わが今上陛下の御安否であつたことに、一層の感激を覺えた。

「陛下は、至極御健勝に渡らせられます。」

「それは何よりおめでたいことです。今上陛下は、まだ御年が若くいらせられるのに早く大統を御繼ぎになつて、何かと御辛勞の多い事と御察ししてゐます。陛下は皇太子の御時分に此處を御訪問下さつた。私にはそれが忘れ得ぬ記憶になつてゐます。どうか御歸國の上は、宜しく奏請して下さい。」

法王は靜かにかういつて、しばし當時を追想せらるゝかの樣子であつた。

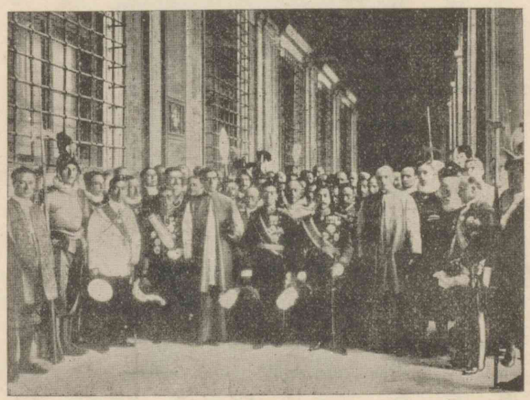
私は、直接陛下に奏請する資格を有しないから、私の懇意な大官を通じて御傳奏申上ぐることを御答へした。

それから、先年のわが關東大震災についてお話があり、その後の復興狀況を御尋ねになつたから、私は帝都復興の狀況を詳細

先年　大正十二年九月一日。

その後　作者がヴァチカン宮殿を訪ねたのは、昭和二年四月七日である。

に御答へすると、法王は



ヴァチカン宮殿内の皇太子殿下

「日本は地質が比較的新しくて、まだ地盤が十分に固まつてゐないから、震災が時々起るのはお氣の毒である。併し、日本は將來に富み希望に滿ちてゐる。その上、國民が勇氣に富み、且勤勉であるから、復興事業も遠からず完成せられる事と思ふ。」

と話され、更に日本の現在人口について御尋ねになつたので、私は日本の人口は朝鮮・臺灣を合せて約八千萬で、年々七十萬以上を增加しつゝあること、從つて移民問題は日本刻下の急務なることをお答へすると

ブラジル Bragil

ペルー Peru

「日本の移民は南米、殊にブラジルで年々非常な增加を示してゐる樣子であるが、同國駐在の日本人係りの一宣教師が、この程歸つて來ての話によると、日本人は從順で、且勤勉であるといふことで、大さう評判がよろしい。尙秘露（ペルー）の日本移民も、なかなか好成績だと云ふことです。」

と仰せられた。

私はこれに對して、尙この上とも、カトリック教國たる南米の諸國民に聖訓を垂れられて、日本移民を御保護下さるやうに御願ひしたい旨を答へた。

それから話は日米問題に移り、ガスパリー大僧正から、日本はいつ米國と戰爭するかと云ふ問が出たので、私は

「世人は動もすれば日米兩國が今にも開戰するかのやうに言

ひふらすものがあるが、それは全く無根の惡宣傳に過ぎない。日本國民にはかかる考を有するものは絶無で、寧ろ日米親善を熱望し、日米提携して、相互の福利を增進することに努めてゐる。その上、米國は日本の生絲の大顧客であり、且日本は如何なる國よりも米國の大顧客で、兩國は經濟的に極めて密接な關係を有してゐるのであるから、固より兩國が交戰を希望する謂はれはない。又先年の歐洲大戰の結果に鑑みても、戰勝國・戰敗國共に、非常な痛手を受けて、今日に至るも尙その瘡痍に苦しんでゐる實情である。戰爭の慘禍を考へると、戰爭などは到底出來るものではない。願はくは猊下も、日本人は絶對に戰爭の意志を有しないばかりでなく、寧ろ衷心から日米親善を希望してゐると云ふことを、機會ある毎に米國民は勿論、世界の信徒に御諭しが願ひたい。」

と答へた。

ピエトロ寺屋上より羅馬市街を望む

法王はまた、

「明治大帝は、古今稀に見る英君に渡らせられた。私は、大帝の御盛德に關してはよく承知してゐる。」

と言ひながら、卓上に置かれた鳳凰模樣の磁器香爐を御指しになつて、

「これは明治大帝が、日本の或貴顯の方に賜はつたものであるが、その方は、かかる高貴な品を保存することは一私人では至難のことであるからと云ふので、私の所へ持つて來られたの

昨年　大正十五年
明年　昭和三年

である。それで私は、常に座右に置いて珍重し、大帝の御盛德を偲ぶよすがとしてゐる。」

と語られ、且私が昨年法王卽位二十五年祭の時に開催せられた展覽會のために献納した十三像の佛畫、京都祇園會の閑古鳥鉾の模型の禮を述べられ、明年から開設せられる常設博物館に、是等の品を陳列するつもりだと云ふことを話された。

謁見が終るに臨み、法王は

「今上陛下の御幸福と御健康を祝福します。」

と言つて、靜かに握手せられた。

かうして、感激に滿ちた謁見は、一時間餘で終つたのであつた。法王の慈愛に輝く溫顏と、諄々として說かれるその聲とは、今尙彷彿として私の記憶に新なるものがある。

私は、この思ひ出多きヴァチカンの半日を永久に忘れることが出來ないであらう。（歐亞に使して）

吉田絃二郎　明治十九年十一月佐賀縣に生る。本名は源次郎、前早稻田大學教授。英文學者、小說家。アルプス Alps

一四　上高地遊記

吉田絃二郎

徳本峠より穂高を望む

徳本峠は海拔七千百尺、上高地よりする登山者にとつて日本アルプス第一の關門である。

日さへあらば、天氣さへよくば、上高地の溪谷をへだてて、直ちに穂高の靈峯と面接すべく、恐らく穂高展望の隨一なるものであらうに、日は暮れ、あらしは木をうつ。

峠の茶屋の戸を排して中に入れば、すでに五六人の學生たち

シャツ Shirt

は毛布をかぶつて寢につかうとしてゐる。雨を防ぐためにかぶつて來た油紙は破れ、肌は雨に打たれて寒さにわなゝく。シャツを取りかへ、冬の外套を着て、少憩の後山を下る。

日は暮れたが、まだ道はほの白く見える。雪溪は杳然として道に沿ひ、夕暗の中に流れてゐる。

山を下るにつれて木立深く、道はやがて爪先をも辨じがたくなる。雨のなかに提灯を點じて道を拾ふ。雨具の下に辛うじて燭をいたはりつゝ守る。幾度か燭を消されては嵐のなかに立ち迷ふ。道に沿うた雪溪のみが暗の中にたど〳〵しく泛ぶ。下つて行く谿の方の霧の中から、にはかに二三點の燭が見出された。旅館「五千尺」からの迎への火ではないかなどと語りながら、火を目あてに下つてゆく。五六人の若い人たちが立ちどまつてゐて、「大きな牛が數頭この下の道の眞中に寢てゐてとても

下りてゆけぬから、峠まで引きかへさうと思つてゐる。」といふ。

日本アルプスの秀峰

わたくしたちは山を下つて行つた。いかにも立派な乳牛が一頭の仔牛をつれて、あらしの中に悠々と道の眞中に寢そべつてゐる。仔牛の頭を撫でてやれば、仔牛は雨に打たれた眼をしばたたきながら旅人を仰ぎ見る。

間もなく道は平たんになつた。廣い蕗の葉と熊笹につゝまれたぬかるみの道を急ぐ程に、道は沼と化してしば〳〵脛を沒する。野兎が道を横切つて提灯の燭をかすめる。

天も地もただ晦冥。山も見えず空も見えない。恐らくわたくしたちは五六千尺の深い霧の海の底を歩いてゐるのであらう。振りかへれば後からついて來てゐた、かの五六人の登山者たちは、いつの間にか遠ざかつてしまつて、はるかの霧のなかに、ただ一度夢のごとく描き出された灯影を見出したのみで、つひに灯影を失ひ、聲を失つてしまつた。

わたくしたちは急ぎに急いだ。幾度か燭をかざしては丸木橋をわたつた。濁流は丸木橋を沈めてゐた。その間にも山の男たちは山案内の喜作爺がその子とともに雪崩に打たれて死んだこと、乘鞍の牧場に熊が出て番人を食ひ殺したことなど、いかにも山の物語らしい話をつづける。

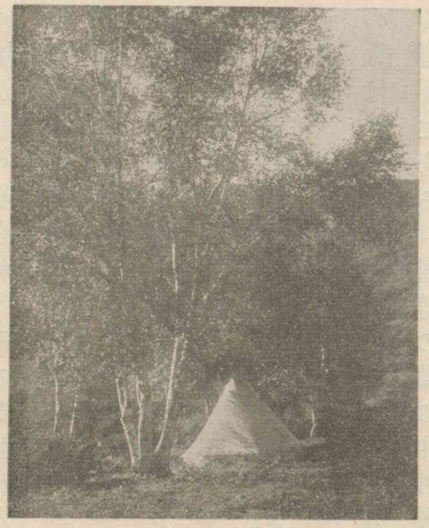
燭が消える。嵐は溪に狂ふ。ただ嵐の聲のみである。聞として聲なきにもまさる山のわびしさは、嵐の夜の、嵐の吐息する

キャンプ
Camp

間の山の沈默であらう。木に凭りては冷たき雨を避けつゝ、嵐の底の靜けさに耳を傾ける。

靴には水が溢れ、背には冷たい雨が流れ込む。着替へたばかりのシャツもぐつしよりになる。まゝよ、道あるも道なきもかまふことかは。快く雨に打たれつゝ草を分けて木の下をくぐる。

霧のなかに二つ三つ四つと幻のやうな燭がまたゝき始める。若い人たちのキャンプである。小梨平の柔かな草の上には、若い人たちの美しい夢



上高地のキャンプ

テント tent

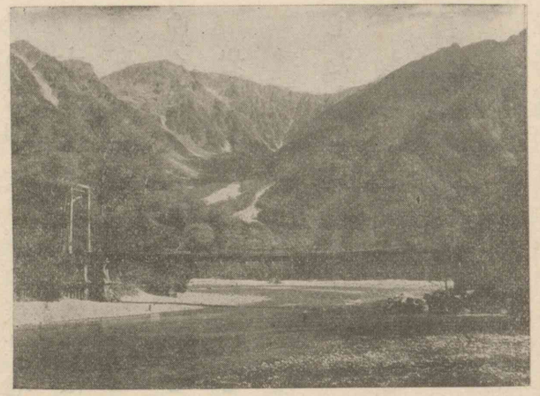
モナステリイ monastery 修道院

を守る幾十のテントが寂然として嵐の中に横たはつてゐる。

上高地の嵐の夜は若い人々の靜かなテントを洩れて來る燭によつていかに尊くせられ、懷かしくせられてゐるか知れない。若い人達よ、君等こそ人生の最も尊い幻に生きてゐるのだ。君等こそ天上へのあこがれを如實に生きてゐるのだ。ただ一本の蠟燭、一個の飯盒、一枚の毛布、一挺の手斧。君等はまさにワルデンの池のほとりの哲人の生活を生きてゐるのだ。小梨平のやはらかな草の中に、君等の天幕を洩れてくる一本の蠟燭の火を見る時、上高地の夜がいかに尊く清くせらるゝことであらう。君等の草の中のキャンプの火は、かの中世紀のモナステリイの窓を洩れて來る聖火の如く靜かである。君等の草の中の夢を想ふ時、わたくしの胸はうづく。

夜十時上高地の旅宿「五千尺」に着く。

まだ夜の明けきらぬうちに、隣室の若い人たちは雨を衝いて宿を出て行つた。



河童橋

夜明け方になつて、雨は小降りになつたが、梓川の流はひたすら水勢を增しに增した。

わたくしは起きて窓を排して直下の流をながめた。梓川はやゝ濁つて渦をなして流れてゐた。水柳の下葉は重く水に垂れてゐた。小雨が横なぐりに降つてゐた。河童橋の上には二三の若い人達が、空模樣を案じてはたゝずんでゐた。

わたくしは、ふとその刹那に窓と直面してそゝり立つてゐる

黑い岩山の一角を見出した。雲は低く垂れてわづかに梓川彼岸の水柳と、白樺の森林地帶のみを遺してゐた。

十分、二十分、わたくしは暗い心を抱いて、密雲の奥に隱された穗高の雄姿を想像しつゝ、低く垂れた水柳の枝の下をくぐつてゆく梓川の流を見つめてゐた。

岩燕が半天をかすめて南から北へ矢の如く飛んだ。

魂飛ぶといふのは、恐らくその刹那のわたくしの心境を說明したものであらう。

わたくしは懼然として偉大なる穗高の靈峰に直面してゐる自分自身を見出した。

明神岳から前穗高の正面がその鐵のごとき千仞の懸崖を嵐の相搏つにまかせ、雲の相摩するにまかせ、突兀として天に接してゐるのであつた。文字通りに一萬幾百尺の穗高は矗々とし

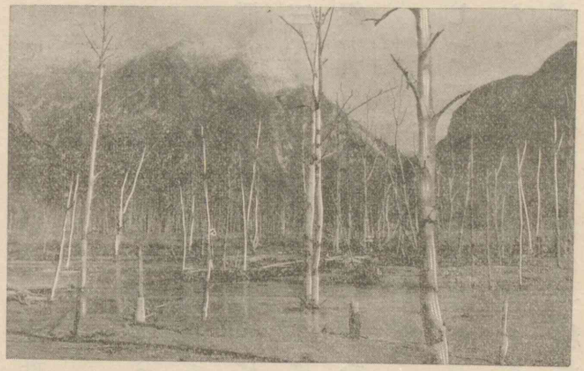
て北の半天をかぎつて直ちに天に觸れてゐるのであつた。そしてわづかに梓川の碧珠のごとき流をへだてて窓に迫つて來た。

雨は沛然として岩をうち、雲は遽然として岩壁に碎けた。

嶺をつゝむ雲の奥からは縹渺として幾百條の銀糸のやうな瀧が斷崖を傳はり、直ちに天に懸つて落ちてゐる。まさに銀河三千丈、千曲萬折して天に懸る姿である。雲は徐に徂徠しては銀河を香煙の懷につゝむ。

雲はその嶺をあらはにすることを惜しむかのやうに、纏綿として一聯の尾根のほとりを低迷してゐる。時として、わたくしたちは雲のなかに、ちやうど紗をへだてて物を見るやうに、淡墨で描かれた尾根の一線が、高い天空を横ざまにつらぬいて走つてゐるのを見た。

わたくしは雨に濡れた穂高を見たことを心からよろこんだ。嶺も岩も雨に濡れて鐵のごとく黑い。そこに、雲のなかに鐫りつけられた幾百條の飛瀑が、その黑い岩壁を縫うて天空から飛散るのであつた。



上高地大正池より穂高岳を望む

雲が晴れ、雨がやむにつれて、穂高の大雪溪は黑い岩山と岩山の間に大傾斜をなして、天界から悠然として流れて來た。最初は瀧の如く見えた。雲が黑い溪を靜かにはひながら尾根の方へ上るにつれて、雪溪は横にも縱にもひろげられて行つた。

雪溪をとりまく幾つもの岩山と岩山との間には、はひまつの森林地帶が、たとへば青い島々のやうにとりのこされてゐて、それ等の島と島との間には、やはらかな、しかも雪溪におとらぬほどな、廣い草原が離々としてかがやいてゐる。白い雪に對してその草の青さは貴い瓊玉を聯想させる。半日その草の上に仰臥して白日夢を樂しむことを得ば、まことに人生の至福であらう。雲は靜かに草原をかすめ、雪溪に消え、やがて絶壁に湧いて天に攀づる。

空が晴れたと若い人々が狂喜して叫んだ。雲のすきまから日の光がミルクのやうなしらかばの幹を照らしてゐた。積のほとりにはまだ小雨が低徊してゐた。

その刹那であつた、わたくしはかつて見たことのない美しい自然を見た。優婉といふにはあまりに大きく尊かつた。莊嚴

といふにはあまりに聖麗であつた。眞に恍惚の境であつた。

雨にぬれた穂高・明神の全幅を通して、七月の太陽は一草一石一木の上にも白銀をちりばめてしまつた。岩は白銀にかがやき、瀧も、雲も、斷崖もことごとく光つた。岩を落ちる一涓一滴ことごとく光りに光つた。

たちまちにして雲は山を包んだ。岩をつゝんだ。ただ幾百條の銀龍のみが日の光を浴びて、黝い岩に緣り、雲の間に或は閃閃として、或は縹渺としてわたくしたちの頭上一萬尺の高さに翔けるのであつた。わたくしは雨の上高地を訪れたことをありがたく思つた。

（山水大觀）

一五　海戰の前夜

小笠原長生

明治廿七年七月廿五日も名殘なく暮れて、早初更に近し。余は高千穂の士官室を出でて私室に入り、軍服を寢衣に着替へ、眠に就かんと床上に横たはりぬ。酷暑燒くが如く流汗背を濡して容易に眠をなし難し。

小笠原長生
佐賀縣の人、慶應三年生、子爵、海軍中將。

「艦長諸士官を召す、請ふ速に至れ」。數人の從卒、中甲板を走つて士官の私室を呼び廻りぬ。予は直ちに起きて、再び軍服を着し、艦長室の戸を排して入れば、衆既に在り。皆椅子に倚つて默然一語なし。時に艦長野村大佐半白の髯を捻り、從容として曰く、「諸君報國の秋いよ〳〵至りぬ。日清の國交終に破れたり。」と。語は霹靂の如く耳底に徹し、並みゐる諸士は艦長の面を視つめぬ。艦長は語を續けて、「未だ詳報に接せざれども、今日我が吉野・浪速・

小笠原長生

シャンペン champagne

秋津洲、偶〻豐島沖にて清艦濟遠・廣乙・操江・及び運送船一隻に逢ふや、濟遠突然我に向つて發砲せり。茲に於て我が三艦も應戰し、戰鬪一時間にして濟遠・廣乙を驅逐し、運送船を沈め、操江を捕獲せりと聞く。艦隊は遠からず北進して敵と一大決戰を試むべし。諸君幸に努力して、以て忠名を竹帛に垂れよ。今日の戰勝はこれを祝せざるべからず。いざ共に一盞を傾けん」といひ、從卒をしてシャンペンを持ち來らしめたり。乃ち相共に盃を擧げて天皇陛下萬歲・海軍萬歲を三呼し、一氣に滿を引いて艦長室を出でたり。

舷窓によりて望めば、更けゆく空は銀河長く流れ、星光淋しく瞬き、近き島の夏草に咽ぶ蟲聲聞えて、夜色沈々たり。萬感は胸に溢れて眠らんとして眠る能はず。父君未だ世に在せし時、常に余にいつて曰く「爾華冑に生ると雖も、元これ武門の裔なり。豈觀月弄花を事として、碌々一生を終ふべけんや。宜しく自ら進んで筋骨を鍛へ膽力を練り、有事の日一身を國家に致して、以て君恩の萬分の一に報ひ奉るべし」と。言猶耳にあり、而して其の人なし。尊靈願はくは照覽あれ、不肖の兒、學業を卒へて士官の列に入つて既に七年なり。然れども、性魯鈍にして一事も成すところなかりしに、計らざりき、今月今日、軍に從つて將に一大決戰に臨まんとす。寔にこれ千載の一遇、武人の面目何ものかこれに加へん。縱令身は砲彈に中りて軍艦旗の下に斃れんとも、魂魄

布哇

布哇
Hawaii

は勇みて黄泉なる父の前に進まんと。一念此に至つて壯心の大いに湧き立つを覺えぬ。頭を回らせば、慈母堂にありて、齡半百に近し、且多く藥石に親しむ。開戰の事を聞き給はば定めて心を勞し給ふべし。我が高千穗は過ぎし彌生の初旬、命を奉じて南方三千里の布哇に航し、同島に泊すること三閲月なりしが、偶〻韓山不穩の飛報に接して、急航横須賀に歸り、留まる事四日にして再び遠征の途に就きぬ。當時唯一度邸に歸つて慈顔を拜したりしのみ。軍人陣に臨む、固より生還を期すべからず。いでや一書を遺して訣別せんと、乃ち燈火の下に二通の書面を認め、其の一を執事某に寄せて後事を託しぬ。

（思出を語る）

一六　俳文二章

一　竹植うる日

こぞの夏竹植うる日の頃、憂き節しげき浮世に生まれたる娘愚かにして、ものに聰かれとて名をさと〻呼ぶ。今年誕生日祝ふころほひより、てうちあはゝ、天窓てん〳〵かぶり〳〵振りながら、同じ子供の風車といふものを持てるを、切りに欲しがりてむづかれば、とみにとらせけるを、やがてむしや〳〵、しやぶつて捨て、露ほどの執念なく、直に外の物に心移りて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それも直ちに倦みて、障子の薄紙をめり〳〵むしるに、よくした〳〵とほむれば誠と思ひ、きやら〳〵と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきらきらしく清く見ゆれば、迹なき俳優見るやうに、なか〳〵心の皺を伸ばしぬ。又人の來りて、わん〳〵は何處にといへば、犬に指さし、かあ〳〵はと問へば烏に指さすさま、口もとより爪先まで愛敬こぼれて愛らしく、いはば春の初草に胡蝶の戯るゝよりも

括弧の内は一茶の自註。

やさしくなん覺え侍る。

此のをさな、佛の守りし給ひけん、逮夜の夕暮に、持佛堂に蠟燭照らして、鈴うち鳴らせば、どこに居てもいそがはしく這ひよりて、早蕨の小さき手を合せて、なんむ〳〵と唱ふ聲しほらしく、ゆかしく、なつかしく殊勝なり。それにつけても、おのれ頭にはいくらの霜を戴き、額にはしば〳〵波の寄せ來る齡にて、彌陀頼むすべも知らで、うか〳〵月日を費すこそ、二つ子の手前も恥かしけれと思ふも、其の座を退けば、はや地獄の種を蒔いて、膝に群る蠅を憎み、膳をめぐる蚊を誹りつゝ、あまつさへ佛の戒めし酒を飲む。（是れより見るにつけつゝまで子供の樣）折から門に月さしていと凉しく、外に童べの踊の聲のすれば、直ちに小椀投げ捨て、片ゐざりにゐざり出でて、聲を揚げ手眞似して、嬉しげなるを見るにつけつゝ、いつしか彼をも振分髪のたけになして、踊らせて見たらんには、二十五菩薩の管絃よりも、遙まさりて興あるわざならんと、わが身に積る老を忘れて、憂さをなんはらしける。

おらが春　小林一茶の著、一茶は、江戸時代の俳人。信州（長野縣）の人、文政十年歿、年六十五。

かく日すがら、男鹿の角の束の間も、手足を動かさずといふ事なくて、遊び疲れるものから、朝は日のたけるまで眠る。そのうちばかり、母は正月と思ひ、飯炊きそこら掃き片付けて、團扇ひらひら汗をさまして、閨に泣聲のするを眼の覺むる相圖と定め、手かしこく抱きおこして裏の畠に尿やりて、乳房あてがへば、すはすは吸ひながら、胸板のあたりを打ちたゝきて、にこにこ笑ひ顏をつくるに、母は長々胎内の苦しびも、日々襁褓の穢らはしきも、ほと〳〵忘れて、衣のうらの玉を得たるやうに撫でさすりて、一入喜ぶ有樣なりけらし。

蚤の迹數へながらに添乳かな　（おらが春）

二　老　狸

結城の丈羽、別業を構へて、一人の老翁をして常に守らせけり。市中ながらも樹生ひ層み、草繁りて、聊か世塵を避くる便り善ければ、余も暫らく其の所に宿りしにけり。

翁は洒掃の外なすわざも無ければ、孤燈の下に念珠爪繰りて、秋の夜の長きを歎ち、余は奥の一間に在りて、句を錬り詩を呻き居けるが、やがて困じにたれば、蒲團引き被うで、とろとろと睡らんとする程に、廣縁の方の雨戸を、どし〳〵〳〵と叩く。暫するに二三十ばかり列ね打つ音す。いと怪しく胸轟めきけれど、むくと起き出でて、やをら戸を開き見るに、目に遮る物無し。又臥處に入りて睡らんとするに、初の如くどし〳〵と叩く。又起き出で見るに物の影だに無し。いと〳〵おどろ〳〵しければ、翁に告げて如何がはせんなど謀りけるに、翁曰く、「御座めれ、狸の所爲なり。又來り打つ時、足下は速かに戸を開いて逐ひ打つべし。翁は背戸の方より廻りて、くね垣の下に隠れ居て待つべし。」と、答引き側めつゝ窺ひ居たり。

與謝蕪村

余も狸寢入りして待つ程に、又どし〳〵と叩く。あはやと戸を開けば、翁もやゝと聲掛けて出合ひけるに、すべて物無ければ、翁打腹立ちて、隈々殘る方無く狩り求むるに、影だに見えず。

斯くすること連夜、五日ばかりに及びければ、心勞れて今は由まふべくともあらず覺えけるに、丈羽が家の僕長なる者來りて言ふ、「其のもの今宵は參るべからず。此の曉、藪下といふ所にて

里人狸の老いたるを打ち得たり。想ふに惡しく驚かし奉りたるは、疑ふべくも無くシヤツが所爲なり。今宵は睡を安くおはせ。」など語る。果して其の夜より音無く成りけり。憎しとこそ思へ、此の程旅の佗び寂しきを問ひ寄りたるかれが心のいと哀れに、假初ならぬ契りにやなど打歎かる。されば善空坊といへる道心者も語らひ、布施取らせつ、一夜念佛してかれが菩提を弔ひ侍りぬ。

秋の暮佛に化ける狸かな

狸ノ戸ニオトヅル、ハ、尾ヲモテ叩クト人云フメレド、サニアラズ。戸ニ背ヲ打チツクル音ナリ。（新花摘）

一七　はちす葉

寛平の御時后の宮の歌合の歌　紀貫之

新花摘
與謝蕪村の著、蕪村は摂津（大阪府）の人、俳人にして畫家、天明三年歿、年六十八。

紀貫之
平安朝の歌人。醍醐・朱雀の兩朝に仕へた。古今集の撰者の一人、土佐日記の作者。天慶九年歿。

① 夏の夜のふすかとすれば郭公、
　なくひとこゑにあくるしのゝめ。

はちすのつゆをみてよめる

② はちす葉のにごりにしまぬ心もて、
　なにかはつゆを玉とあざむく。

月の面白かりける夜、曉方によめる　ふかやぶ

③ 夏のよはまだよひながらあけぬるを、
　雲のいづこに月やどるらん。

秋立つ日よめる　藤原敏行朝臣

④ 秋きぬとめにはさやかにみえねども、
　風の音にぞおどろかれぬる。

題しらず　よみ人知らず

⑤ 昨日こそさなへとりしか、いつのまに

ふかやぶ
清原深養父。平安朝の歌人。

藤原敏行
平安朝の歌人。寛平九年右兵衛督となる。延喜七年歿。

大江千里
平安朝の歌人、延喜三年兵部大丞となる。歿年不詳。

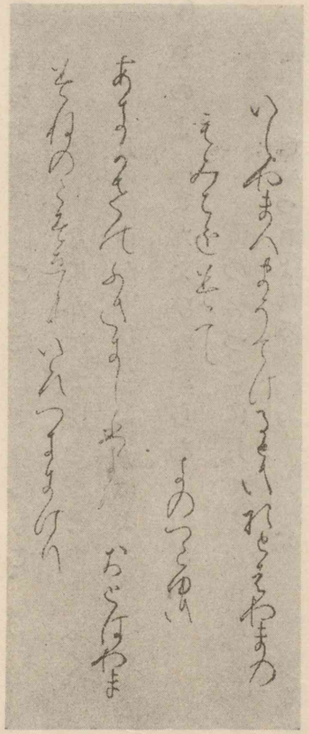
筆蹟
次頁を見よ。

文屋康秀
平安朝の歌人、六歌仙の一人、元慶三年縫殿助となる。歿年不詳。

いなばそよぎて秋風ぞふく

これさだのみこの家の歌合によめる　大江千里

⑥ 月みればちぢに物こそかなしけれ、
わが身ひとつの秋にはあらねど。



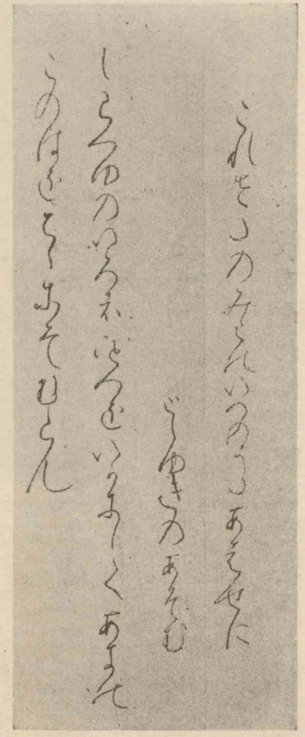
古今集（傳紀貫之筆）

同　文屋やすひで

⑦ 草も木も色かはれどもわたつみの
浪の花にぞ秋なかりける。

同　としゆきの朝臣

⑧ しらつゆの色はひとつをいかにして
秋のこのはをちぢにそむらん。



古今集（傳紀貫之筆）

石山にまうでける時おとは山の
もみぢをみてよめる　つらゆき

⑨ 秋風の吹きにし日よりおとは山
みねの梢も色づきにけり。

凡河内躬恒
平安朝の歌人。古今集撰者の一人。寛平十一年和泉權掾となる。古今和歌集二十卷。延喜五年、貫之・躬恒・友則・忠岑の四人が醍醐天皇の勅を奉じて撰した和歌集。

島木赤彦
本名は久保田俊彦、長野縣の人、歌人。大正十五年歿、年五十一。

しら菊の花をよめる　凡河内みつね

心あてにをらばやをらんはつしもの
おきまどはせる白菊の花。　（古今和歌集）

一八　歌人

島木赤彦

生活精神の統一から我々の歌は生れて來る。簡單な生活は統一され易く、複雜な生活は統一され難い。統一し難きほどの生活を統一し得る多力者が、歌人に現れ來らんことを私は望んでゐる。

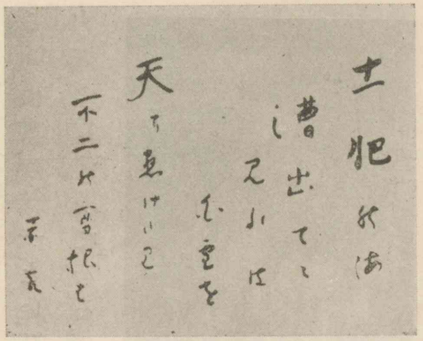
複雜の統一は較もすれば多岐面を露はし易く、愈々多岐にして拾收する所がない。諸相を容るゝに似て一相の眞に到達し得ないのである。簡單な統一には底の淺い憾があり、深しとするも周からずして早く墮する所があり、一たび撼さるれば底を傾ける危さがある。諸相の一部に局在して好しとするもの、偶々他の一相に遭遇して驚き、二相三相に遭遇して摧け了るの類である。複雜の統一といひ、簡單な統一といふも、以上の如きは皆無力者の爲す所である。無力を料らずして多端に突き當るよりも、無力を知つて簡約するを殊勝とすべきも、はじめより回避して、終りまで回避したら、人間諸相を具備する時がないであらう。

島木赤彦

纏まりの早く、弊の少いのを目指せば、簡單な統一を擇ぶよりよきはなく、大成を目ざせば、積極的な用意を必要とする。この邊になれば、只その人に依るとするの外はあるまい。

筆蹟
土肥の海
漕出てて
見れは
白雪を
天に懸けたり
不二の高根は
赤彥

多面に突き當つて統一あるは難い。只敬虔一途な心と、その力量とが、これを簡にし、至簡にする。釋迦は夫婦道をも親子道をも通り、結婚後十三年にして出家し、後に遂に人間道を簡約してゐる。孔子は更に多面の道に突き當つて、陳蔡の野に困阨し、六十八歳にして始めて退いてその道を筆にした。多力なる簡約は至簡にして至繁である。一端にして全體である。統一し難きほどの生活を統一し得る多力者が歌人に現れんことを望むはこの意である。彼の自恣放縱を以て人間性の自然の發露なりとして、自ら簡約する所を知らざるともがらの如きは、今の時眼中において論ずる要がないのである。



島木赤彥筆蹟

賀茂眞淵が言へる「なすわざも少く、いふ言の葉も多ならざりけり。」とは、「ひたぶる心」の現れであつて、この消息は上古人にも現代人にも通じ、男女にも、老若にも通じ、簡單なる生活の統一者にも通じ、複雜なる生活の統一者に至つて益〻多く必要を生ずべきである。多言多行は濫言濫行に近く、要言要行は深きひたぶる心によつて益〻その幅を縮小せらるゝであらう。複雜な統一者ほど縮小が多くなさるべきであつて、さやうな縮小をなす所の主體に多力の名を冠らせるのである。多力者とは生活精神の積極・消極兩面に徹した統一者であつて、消極的に偏した統一者は多く回避者である。歌人の群が回避者であるならば、人間諸相を兼ねた圓滿具足の歌は生れぬであらう。多言多行、濫言濫行のともがらは論外である。

議論が立派になると、自分の生活がむづ痒くなるものである。

自分の生活を目安に置いて、ひそかに考へてゐればいいのである。人格に關する議論の堂々たることと、屢々なることとは、自分の生活に虚僞性を帶ばしめることがある。

高き生活、清き生活、美しき生活といふやうなものに甘える傾は、宗教家・文學家・美術家等に多いやうである。鷗外は高熱に苦しみつゝ、陸軍省に通ひ、感冒に罹りつゝ、博物館に通ひ、萎縮腎に斃れんとしつゝ足を引きずつて圖書寮に通つた。それほどの覺悟があつて、はじめて生活統一の多力者たり得るのであらう。

（歌道小見）

一九　義經傳說

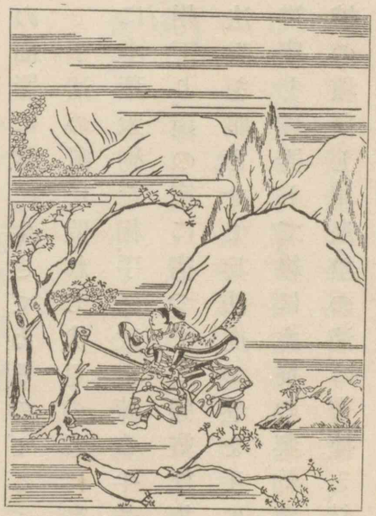
島津久基

島津久基　國文學者。前東京帝國大學助教授。現東洋大學教授。

今日は「義經の八艘飛」といふ何だかたわいもない童話めいた題目を掲げましたが、一體私は子供の時から、何がなしに牛若丸の義經が好きだつたのでございます。そして子供心のまだうせきらぬ私の眼の前には、今もなほ、小さい私の胸に刻みつけられた時のまゝの、あの九郎太夫判官といふ國民的英雄が、忘れ得ぬ面影に常に生きてゐるのでございます。

平治の亂に敗れて伏見の雪に艱む常磐母子、鞍馬山僧正ヶ谷に木葉天狗を相手に武を練る牛若丸、金賣吉次が御供しての奥州下り、鏡の宿に宿つての强盗熊坂長範の一類討滅、さては鬼一法眼を服させて兵法虎の卷を手に收め、五條の橋に大の荒法師辨慶を飜弄して、終に主從の契約を結ばせる幼少年時代から、鵯越の坂落し、屋島・壇の浦の奇捷と、赫々たる武勳時代を經てしかもその功報いられぬのみか、梶原が逆艪の遺恨は却て得失地をかへて、言々血を吐く腰越の申狀も容れられず、僞の起請文の土佐坊に夜討をかけられて、終に都落の果ては、大物の浦の難船、吉

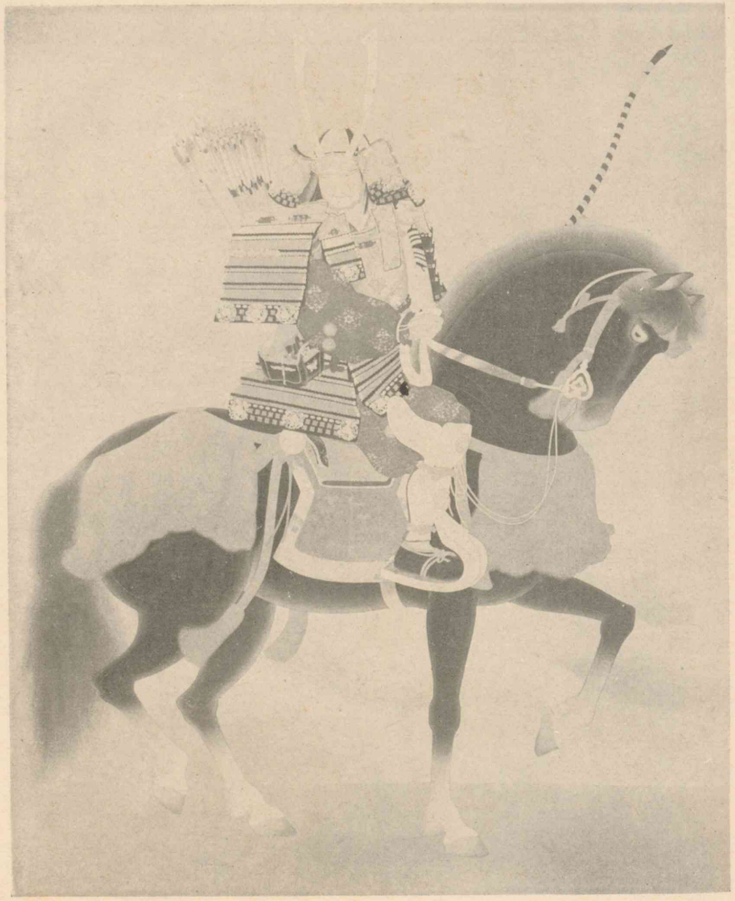
野山の落魄、靜御前との別離、忠信の身替、運命は愈〻天地をせばめて、北國落の主從が山伏姿も、安宅の勸進帳、笈探しの危難となり、辨慶の智勇によつて辛く虎口を遁れ、第二の故郷と懷かしむ奥の秀衡が館へ安堵の息をつき流したと思うたは束の間、不忠不義の泰衡兄弟に賣られて、哀れや高館に末路の悲しみを留め、數奇の一生を、運命のまに〳〵夢と衣川に流した九郎御曹司は、まことに敬慕と同情とを寄せずには居れない、我等の幼少からの見ぬ世の友であり、我等の最も好きな史上の人物の一人であります。



鞍馬山に武を練る牛若丸

いや、私達ばかりではないのであります。既に當時からかの若き天才將軍の武名と功業と又人柄と境遇とが、多くの讃美者共鳴者を有してゐたことは、あの平家の榮枯盛衰を寫し敍してゐる「平家物語」「源平盛衰記」が一見義經文學の觀をすら示してゐるかに見えるにも想像せられます。

更に室町時代になりまして、義經を主人公とした歴史小說「義經記」が出來、又謠曲に、幸若舞曲に非常に多くの判官物が作られ、之を繼承した德川期には淨瑠璃に、歌舞伎に、種々の歌曲に、小說に、同じく當代武勇傳說の大立物である曾我の十郎・五郎、並に虎御前・祐經・朝比奈の面々に對抗して、これに義經・辨慶・靜御前・繼信・忠信に、梶原・富樫など、役々揃ひで以て無數の義經傳說と義經文學とを發生させ、展開させ、今日に至つてもなほ繰返し上演・愛讀せられるものが少くないことは、皆樣よく御承知のことと存じ



源　義　經　　木村斯光筆

ます。

この昔から今に變らぬ義經愛好熱、所謂「判官贔屓」は、祖先英雄に對する崇拜、國民的理想人へのあこがれ、而して弱者に對する任俠義憤のほとばしりの融合から生れ來る、我が國民性に根ざす美しい淨い情熱の結晶でありまして、この心持の中に我が義經は千古に生きてゐるのであります。そして史實に何等徵すべきものなき彼の幼少年時代の半生は、又失脚以後の不分明な彼等主從一行の行動は、實にこの「判官贔屓」の心から、さまざま空想に滿ちた興趣深い姿に彩られてしまつてゐるのであります。衣川の館に三十一歳を一期として自刄した名將を痛惜するの餘り、ひそかに生き脫れて蝦夷に押渡り、更に發展して北滿の野に雄圖を唱ふるに至らしめたものは、これ亦我が民族の海外發展の意氣の發露であると共に、この止るところを知らざる「判官

贔屓」の情念の飛躍であります。

かくて「判官贔屓」は義經の一生を愈〻傳說化し愈〻文學化し、そして又この傳說化・文學化せられた義經に向つて、更に一段と濃く深い「判官贔屓」を注いでゆくのであります。歷史家はその史實の正しいことを探り究め、史上の人物の傳記の眞を求め傳へようとするのが任務であります。我が義經の一生は、この冷靜な史家達の眼から眺められる時、如何に虛飾粉黛に滿ちてゐることでありませう。その時史家は容赦なく義經に着せてある傳說の衣を俗說である、誤傳であるとして剝いで捨ててしまふのであります。後に眞の史的人物としての義經が殘りませう。しかしその姿は如何に淋しいことでありませう。その時私達は、歷史家達の惜しげもなく脫ぎ捨てた傳說の衣を恭しく拾ひ上げて、それを三保の松原の漁師白龍が獲たといふ天人の羽衣

のやうに、國の寶、家の寶と珍重せずにをられないのであります。何となれば、それは、或は義經彼自身ではないかもしれません。しかしそれは、我等の祖先達が、日本國民が總がかりで長い間かかつて義經に着せかけてやりましたところの、或は手織の、或は

鵜越　（小堀鞆音筆）

舶來の、心づくしの、色とりどりの、模樣さまざまの、尊い魂の織物であるからであります。國民傳說、そこにこそ普遍的な國民精神の無邪氣な僞りなき表現があり、そこにこそ我々自身が住んでゐるからであります。

かうして私共は數多くの義經傳說にそれぞれの意義と興味とを劣らず見出すことが出來るのであります。

さて「義經の八艘飛」であります。子供の時分からよく聞かされた珍しげのない話でありますが、頃は元曆二年三月廿四日、都を追はれ、一の谷を落され、屋島を燒かれ、西海に走つた平家の一門、さしも榮華の昨日の夢も、今は一瞬にしてここ長門壇の浦の海底に一族の屍と共に葬り去られようとする斷末魔、いでや最期の思出に、あはよくば目ざす敵の大將九郎に近づいて組み、冥途の道づれにざんなれと、平軍の大勇士能登守平教經、血眼になつて荒れまはるうち、はたと義經の舟に行きあひました。しや小冠者とひつ捕へようとすると、義經は小長刀をかいこんだまま一躍二丈許隔つた次の船に跳び移ると、教經は殘念と齒がみ

して後を逐ひ、從つて追ひ入れば從つて跳び遁れ、船八艘を追ひ廻りましたが、武運めでたい義經は終に能登守の手に懸らず、先には屋島の浦で射放つた矢面に佐藤三郎兵衛繼信が身替の討死、今日こそと思ふ教經決死の奮闘も遂に目的を果さず、啞然として九郎の後を見送るばかり、數多の源氏の兵に遮られ、安藝太郎兄弟を左右に挾んだまゝ海中へ跳り入つて壯烈な死を遂げたといふ一場の物語であります。

能登守と義經

八艘飛の鬼ごつこをやる二人の武人は、何れもその動作の輕捷機敏な點に於ては著しく神人的で、しかもその廻り燈籠式の運動は、隨分と滑稽味を含んでをります。が、いかな名將九郎御曹司でも、ちと輕業が上手すぎます。尤も牛若丸のその昔、鞍馬山で大天狗僧正坊から天狗飛切りの祕術を授つてゐようといふのですから、朝飯前のことかもしれませんが、その手際の鮮かさと、「こゝまで御出で甘酒進上。」といふ大膽振りは、衆人環視の中にあつて闘戰の巷とは思はれぬ暢氣さであります。かうして我等の義經と一しよになつて國民は樂しみながら、能登守をなぶつて遊ぶのであります。それが平軍第一の大勇士であるだけに一層右の意味が大きくなり、又同時に義經の武運めでたい大將であることを、教經と共に國民一般が肯定するのであります。あの曲藝的な弓流しとこの輕業式の八艘飛とは、義經得意時代に屬する傳說中、相並んで觀衆をして固唾を嚥み、手に汗を

澁澤榮一
青淵と號す。埼玉縣の人、天保十一年生、子爵、實業家。

1. 缺点
2. 功を急ぎすぎる
3. 仕事に對して不平を抱く
4. 謙讓の德にかく
5. 老人の言を排斥する
6. 空想に走りすぎる
7. 治氣に走ぬ

握らせながら、嘆賞と安堵との結末に國民を導く點に至つては一であります。（羅生門の鬼）

二〇　現代の青年に與ふ

澁澤榮一

時勢の推移によつて社會狀態が變つて行く。從つて所謂時代思想なるものは其時の社會狀態を反映するものである。現代の青年は私共の青年時代と違つて、一般に怜悧になつた目先が利く樣になつた。だが、其の反面には幾多の短所もあり、通弊もある。

悧巧になつた現代の青年は、餘りに功を急ぎ過ぎる嫌がある。どうかして早く世に知られようとあせり過ぎるやうである。是が爲には自家廣告もし、自己宣傳もし、機會ある毎に自分を偉く見せようと吹聽する。そして最も大切な自己の修養を閑却

する傾向がある。是は現代人一般の通弊であるが、特に前途ある青年が功をあせるが如きは最も愼むべき事である。修養を怠りながら徒に功を急ぐ事は、例へば商品の質は措いて問はず、イルミネーションで廣告して人に其の存在を認められようとするに等しいものである。

澁澤榮一

現今は總てが廣告の世の中である。廣告が上手であれば商品が賣れる。殊に化粧品や賣藥などは實質よりも寧ろ廣告で賣つて居るが、人間の世に立つのは、化粧品や賣藥を賣るのとは全然譯が違ふのである。然るに功を急ぎ、早く世に知られたいが爲に己の名を賣らうとあせる青年の多いのは、現代青年の爲に惜しむ所である。是は今の青年が餘り悧巧に

なり過ぎて、目先きの事ばかり考へて居る爲であつて、極端な例ではあるが、是では化粧品や賣藥と選ぶ處がないではなからうか。再言すれば、現代の青年は實質を第二に置き、修養を怠り、徒に聲を高めて名を賣り、地位を得ようとする寒心すべき傾向がある。是は第一の缺點である。

蓋し人間の思想は、單に自分の心の中にのみ蓄へて置かれる筈のものではない。況や言論の自由が國法によつて保證されて居る以上、自分の思想を發表する事は少しも差支ないが、時と場所とをよく考へなければならぬ。常に修養に心掛け、所謂內容の充實、實質の完成に努力して居れば、何時かは必ずこれを最も有效に役立てる時が來るのである。自ら進んで知つた振りをし、えらく見せようとする事を、自分自身では早く世に知られ、榮達をするの途であると信じて居るかも知れぬが、第三者の公平な眼から見れば、輕薄な、奧行のない人間と見られ、信賴して仕事を托する事の出來ない人物であると思はれるに過ぎないのである。之に反し、平素修養に心掛けて居る人物は、何時如何なる場合に於ても狼狽するやうな事はなく、本當に價値のある人間と云ふ事が判るのである。

支那の古聖賢はかういふ事を言つてゐる、即ち「才能のある人の世にあるは、恰も囊の中にある錐のやうなものである。」と。是は囊中の錐は上から押されると其の尖端が現れる。それと同じ樣に、實質の備つて居る人は、事あれば必ずその才能が顯れるといふ事を意味するものである。青年諸君はよく此の點を熟考しなければならぬ。自分の力量不相應に功を急ぐ事は、却て將來の榮達を阻害し、蹉跌を來すの基である事を深く思ふべきである。

それから、私は現代の青年が仕事に對して不平を抱く事を甚だ遺憾に思うて居る。例へば「自分は實力があるのに世間では認めてくれぬ。俺を良い地位に使つてくれぬ」とか、或は「私は何何の方面に關して知識を持つて居るのに、其の方面の仕事を與へて呉れぬ」と不平を言つて居る人がある。否、僅少の例外は別として、殆ど青年の悉くが、共通的にかう云ふ不平を抱いて居るやうである。併しながら、是は間違つた考と言はなければならぬ。何故かといふに、良い磁石であれば、自然に澤山の鐵を吸ひつける力を有つてゐる筈で、人間の實力も丁度これに等しく、力があれば仕事は自然與へられるからである。

世の中に仕事は澤山にある。仕事に對して不平を言ふ人は、取りも直さず自分にその仕事を吸收する力を持たぬ人に外ならぬ。然らば如何にすればよいかといふに、與へられたる一つ

筆蹟
誠者天之道也誠之者人之道也
昭和戊辰四月
八十九翁青淵題

澁澤榮一筆蹟

の仕事を、完全に、而も迅速に成し遂げる事が最も肝要である。與へられたる仕事を、迅速に、完全に成し遂げる時は、求めずして信頼せられる樣になり、第二、第三の仕事が來るやうになる。丁度良い磁石が澤山の鐵を吸收すると同じ理窟である。かくしてこそ、眞に價値ある人物として重用さるゝに至り、將來の榮達を期することが出來るのである。

要するに、どういふ詰らぬ仕事でも、決して不平を吐かず、與へられた職務は之を自分の天職と思うて完全に仕遂げるやうにしなければならぬ。若し一つの仕事に對して不平を抱

き怠るやうな青年であれば、それは明かに他の仕事に對しても適材でないといふことを表白して居ると同樣である。かういふ青年は到底將來の榮達を望むことは出來ない。

吾々の青年時代は、漢學の盛んな時代であり、私も主として漢學を修めたが、その教訓の中に、謙讓の美德といふことがある。私は謙讓といふ事は何時の時代にも必要であると思うて居るが、今日の世の中を見るに、どうも謙讓の德を重んじないやうである。是は獨り青年に限つた事でなく、世間一般の風習がさうである。畢竟是は物質文明の發達に伴ひ、人情が輕薄となり、他人を排しても自分の都合を好くするがよいといふ利己心から出たものに外ならぬと思はれる。

自己滿足といふ事は、青年の間に一般に漲つて居る思想であるが、此の考からすれば、謙讓乃至謙遜といふことは時代遲れの思想と思考されるであらう。併しながら謙讓は決して時代遲れでもなければ、間違つた訓でもない。活社會に立つて融和協調し且他人の信用を得るには、どうしても必要な教訓である。唯、謙讓と卑屈とは動もすれば混同し易いから、よく注意しなくてはならぬ。謙讓とは分り易く言へば、出しやばらぬ事である。早く世に知られたいが爲に、自己宣傳や、自家廣告をする事は謙遜の美德を傷つけるものである。さればと言つて、必要な場合にも知つて居る事を押し隱して、知らぬ風を裝ふのは、謙遜ではない。是は寧ろ卑屈の部に屬する。平常は決して出しやばらず、自らを持するに謹嚴であつても、必要な場合には自分の信ずる所を明確に發表するのが眞の謙讓である。

現代の青年は概して「老人の言ふことは古臭い、時代遲れだ。」と排斥する傾向がある。併し是は大なる間違である。時勢の推

移によつて思想も亦遷り變るのは當然であるが、倫理道德は水の流の樣にさう雜作なく動くものではない。私は多年孔子の教を處世の活教訓として遵奉して居るが、何分二千四百年前の教訓であるから、その一言一句が悉く現代に當て嵌まるといふ譯ではないにしても、その根本精神は、人間生活の活教訓とするに足るべき立派な道德である。お互に舊習を墨守し時代に遲れるやうな事は大いに排斥しなければならぬが、されば と言つて、何でも新しくさへあれば良いといふ樣な間違つた考で、能く嚙みしめて消化する事をせず、之を取入れることは最も愼しまなければならぬ。

それから、現代の青年は動もすれば空想に走り過ぎる傾がある。理想はよいが、空想に走ることは大いに愼むべき事である。人間に理想がなかつたら、その人間は單に生きんが爲に働いてゐるに過ぎなくなる。それでは人間としての價値がないと言つても誤ではあるまい。殊に青年に理想がなかつたなら、青年としての存在の意義をなさぬ。されば青年が高遠の理想を抱くことは大いに結構なことであるが、一歩を過つて空想の域に入る時は、却て妨となるに至るのである。

總じて青年は元氣の横溢してゐるのを第一の特色とするが、悧巧になり過ぎた現代の青年は、一面に於て空想に走る傾向があると共に、その半面に於ては活氣に乏しいやうである。是は餘りに目先きの事ばかり考へ過ぎてゐる結果であらう。明治維新の大勢を馴致したのは、青年の力であつた。尤も幕末時代と今日とでは、時勢が違つて居るから、同一に論ずる事は出來ぬが、青年の意氣は斯くあつて欲しいと思ふ。此の意氣がなければ大いに伸びることは出來ぬ。唯くれぐれも注意すべきは空

想と理想とを間違へず、遠大の理想を樹てて、是に向つて邁進すべきことである。又茲に注意すべきは、理想と實際とは必ずしも一致するものではないから、若し理想と一致しないやうな事があつても、決して失望落膽することなく、一層の勇氣を奮ひ起して事に當る覺悟がなければならぬ。青年時代は思想の動搖し易い最も危險な時代である。自暴自棄に陷るやうな事があつては一生を誤る事になる。それにつけても平素の修養を積んで居たならば、如何なる場合にも其の方針を誤るやうな事はないのであるから、修養は處世の第一の必須條件であることを深く心に銘すべきである。

私は活力の最も旺盛な青年及び壯年の人々に最も望を囑する。總ての仕事は此等の活氣横溢せる、元氣潑剌たる人々が中心となつて行ふべきである。されば云つて、先輩を無視することは宜しくない。青年者及び壯年者は未來に生きるのであるから、それだけ將來があり、前途洋々たるものであるが、老年者には未來がない、從つて多く過去に生きる。此の間に青壯年者との隔たりがあるが、老年者には未來がない代り、幾多の實際の經驗を積んで居る。此の實際の經驗といふものは成功と失敗とに拘らず、後進者には生きた教訓であるから、此の意味に於て先輩を重んずべきである。又老人であつても、境遇と健康の許す限りは、分相應の働きをなして幾分でも社會公共のために貢獻するのは、人間としての義務である。私自身は此の信條の下に自分の出來るだけの事はして居る積りである。

青年は元氣に任せて時に盲進することがある。それから老人の言ふことは總てが時代遲れであるとなし、多く其の意見を尊重しない傾向がある。併し縱ひ思想は古くとも實際の經驗

は、机上の名論に勝ること萬々であり、且金錢で購ふことの出來ぬ尊いものであるから、青年諸君も勉めて先輩に接してその意見を敲き、經驗を聞き之を參考資料として能く消化し、仕事をなすに際しても、周到なる用意をなし、先人の失敗の跡を繰返さぬ樣に心掛くべきである。（青淵先生訓話集）

三　秋窓雜記

北村透谷

北村透谷　東京の人、本名は門太郎。文學者。明治二十七年歿、年二十七。

一

かなしきものは秋なれど、また心地好きものも秋なるべし。春は俗を狂せしむるに宜けれど、秋の士を高うするに如かず。花の人を醉はしむると、月の人を清ましむるとは、自ら味ひを異にするものあり。喜樂の中に人間の五情を沒了するは、世俗の免るゝ能はざるところながら、われは萬木凋落の期に當り、靜かに物象を察するの快なるを選ぶなり。

二

希望は人を欺き易きものぞ。今年の盛夏鎌倉に遊びて、居ること僅かに二日、思へらく此の秋こそは爰に來りてよろづの秋の悲しきを味ひ得んと。圖らざりき、身事忽忙として、空しく中秋の好時節を紅塵萬丈の裡に過さんとは。然れども、秋は鎌倉に限るにあらず、人間到るところに詩界の秋あり。欺き易き希望を駕御する道は斯にこそあれ。

北村透谷

三

我が庵も亦秋の光景には洩れざりけり。喉なきやぶるばかりのひよどりの聲々高き梢に聞ゆるに、窓開きてそこかここか

そうち見れば、そこにもあらず、ここにもあらず、窓を閉ぢて書を披けば一層高く聞ゆめり。鳥の聲ぞと聞けば、鳥の聲なり、秋の聲ぞと聞けば、おもしろさ讀書の類にあらず。

四

夜更けて枕の未だ安まらぬ時、蟋蟀の聲を聞くは眞の秋の情なりけり。その聲を聞く時に、希望もなく失望もなく、恐怖もなく欣樂もなし。世の心全く失せて、秋のみ胸に充つるなり。松蟲、鈴蟲のみ秋を語るにあらず、古書、古文のみ物の理を我に教ふるにあらず、一蟋蟀の爲に我は眠を惜しまれて、物思ひなき心に思を宿しけり。

五

芭蕉の葉色秋風を笑ひて、籬を蓋へる微かなる住家より、ゆかしき音の洩れきこゆるに、心ひかれて其が中を窺ひ見れば、年老いたる盲女の琵琶を彈ずる面影、凛乎として俗世の物ならず。その律調の端正なること、今の世の浮華なる音樂に較ぶべからず。うれしき事に思ひぬ。（北村透谷全集）

折れたまへ咲いて見せたる百合の花　透谷

北村透谷筆蹟

三　寮生活の第一夜

谷崎潤一郎

一

七十日の休暇の間、長らく人影の絶えて居た一高のグラウンドの赤土には、ところどころ草が茫々と打烟り、分館の廊下に挾まれた十坪ばかりの中庭は廢園の樣に荒れて、百日紅の幹の蔭に、花の汚れた鬱陽花が、惱ましげな項を垂れて居た。新寮の後の叢の中や本館の煉瓦の隙間などには、晝でも蟋蟀がじい〳〵と鳴いて、遠い田舍から出て來た學生達の胸に、青草の生ひ茂り

谷崎潤一郎　明治十九年七月東京日本橋蠣殼町に生る、戯曲家。小說家。

たる愁みを覺えさせた。

熱い熱い夏の光と闘つて來た經驗は、人々の丈夫さうな赤銅色の面に溢れて見えた。主任の教授が出席簿を廣げて名前を呼ぶ時、順々に「はい」「はい」と答へて行く學生の元氣の好い聲は、教場の四壁に力强く響いた。久し振りで一堂に再會した同窓の連中は、互になつかしい眼を見張つて返辭をした聲の方をふり向いた。

第一高等學校南寮

別けても、去年の十一月以來から缺席がちであつた宗一の、生き返つたやうな雄々しい姿は、誰も彼も珍しがつた。

「どうしたい君、ひどく太つたぢやないか。何處かへ旅行でもしたのかい。」

「うん沼津へ二月ばかり行つて居た。」

「それぢや、もう體は良くなつたらう。」

こんな應答を宗一は幾度もした。

いろ〳〵の學科の受持の教師が、入り代り立ち代り教室へ現はれて、新學期に用ゐる教科書の名が五つ六つ黑板に掲示された。其の中にマイヤーの萬國史だの、ゲーテのエルテルだの、古今集だのが書いてあつた。

久しく書籍に親しまなかつた宗一は、學校のかへりに神田の中西屋から丸善へ廻つて、早速語學の教科書だけを取り揃へ、ついでにホーソーンのツワイストールドテールズや獨逸譯と英譯のダンテの神曲などを買ひ求めた。さうして、途々電車の中や往來を歩きながら、丁寧に包んでくれた覆ひの紙を解いて、レ

マイヤー Myer
ゲーテ Goethe 獨逸の劇詩人。
エルテル 小説「若きエルテルの悲しみ」のこと。
古今集 醍醐天皇が延喜五年に紀貫之・凡河内躬恒・紀友則・壬生忠岑に勅して撰ばしめ給うた歌集。廿卷。
中西屋 今は神田の丸善の支店となつてゐる。
ホーソーン Hawthorn アメリカの小説家。
ツワイストールドテールズ Twice—told Tales

クラム本のアンカットの頁を指で切り開いて、物珍しさうに一枚一枚眼を通した。少しの手垢も着いてゐない、純白の紙の面には、獨逸の活字がこまかく鮮かに印刷されて、遠い洋の向ふの燦爛たる文華の國を想はせるやうな、甘いにほひが爽かに鼻をうつた。名ばかり聞いて居て、まだ手に觸れたことのなかつた一卷のエルテルを、これから日に二三節づつ習ひ覺えて遲くも來年の春頃までには讀破することが出來ると思ふと、新學期の希望も快樂も幸福も、みな其のうちに潜んで居るやうな心地がした。

濱町の内へ歸つて、彼はしばらく二階の書齋の本箱にいろいろの本を出し入れした。そして、遠くの方から眺めて見たり、また抽いて拾讀みをしたり、そんな風にして午後の半日を潰してしまつた。

二

「僕は今度から寄宿舍へ入らうかと思ひます。其の方が時間も經濟だし、勉强も自由に出來ますから。」

と、其の晩宗一は父に賴んだ。

「そんなら、さうするがいい。」

と、父は造作もなく承知して、

「下町に居るより運動も出來て、體が丈夫になるだらうし、今頃からちつと人中へ出て置くのも宜からう。」

と言つた。

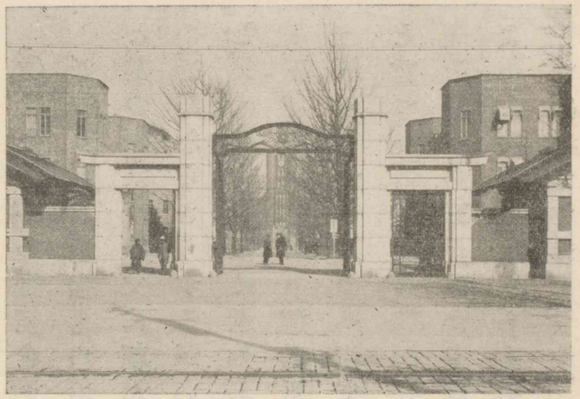
それから三日ばかり經つた宵に、宗一は荷物を車に積んで、いよいよ濱町の家から本郷へ引移る事になつた。

「では行つて參ります。」

帽子を取つて、輕く頭を下げると、車屋は梶棒を上げた。

車は夢のやうに物靜かな下町の夜路を拾つて久松橋を渡り、堀留から伊勢町河岸の藏造りの家並の前を、ばた〳〵と走つて行つた。

大學前の大通りへ來た頃には空はます〳〵冴えて、澄んだ空氣が水のやうに往來へ流れて居た。道路の左側には、人形町と同じに露店が竝んで、其をひやかして廻る人々の姿は、フットライトに照らされる役者の如く、あか〳〵と浮き出て見えた。その中には夜目にも白い二本筋の制帽を冠り、小倉の袴を穿いて參々伍々連れ立つて歩きつゝ、古本を漁つたり、おでんやの暖簾



大學前通り

フットライト foot light 舞臺の前方にならんでゐる脚光。

と云ふ男であつた。

「机は彼處に二つ空いとるぞ。

と、廊下に近いデスクの方を、野村は顧でしやくつて見せた。外の二人――清水と中島は、ちよいと近眼の顏を上げて、鐵緣の眼鏡を電燈にぴかりと光らせながら、默つてお時儀をしたかと思ふと、再びおもむろに本を讀み續けた。

「誰か濟まないが荷物を寢室まで手傳つてくれないか。」

「おゝ、さうか。」

と、野村は氣輕に立ち上つて、宗一と一緒に行李や蒲團を二階の寢室へ運んだ。

二階の寢室と云ふのは、琉球疊を敷いた十疊あまりの日本間で、毎晩就眠時間の十時から十一時の間でなければ、電燈をともさなかつた。暗い室内には男臭い黴臭いにほひが籠つて、月が

デスク desk 机

硝子越しに青白く射し込んで居た。既に蒲團へもぐつてぐつすり眠つてゐる者もあれば、片隅に西洋蠟燭を立てて獨りでこつこつ勉強して居る者もあつた。

宗一は、一通り自分の机へ書物を飾り付けた後、エルテルの豫習に取りかゝつたが、場所馴れぬせいか、どうも落ち着いて居られなかつた。暫くすると、彼はロセッチの詩集を懷にして、ぶらりと後庭の廣場へ歩いて行つた。

何と云ふ美しい晩であらう。……細い草葉の數が、一枚一枚讀めるやうに鮮かで、しつとりした夜露の玉が麻裏草履にこぼれかゝり、二三歩の間に宗一の素足はつやく〳〵と濡れて光つて來た。俯向いて月を踏んで居る彼の胸のあたりには、自分の形が黑い影を落して、明瞭に染め出された。

練兵場のやうに、遠く續いた坦々たるグラウンドは、さながら

ロマンチック romantic 小說的。空想的。

センチメンタル sentimental 感傷的。

近松秋江 本名は德田浩司、岡山縣の人、明治九年生、小說家。

大きな湖水の如く透き徹つた夜色の底へ沈んで、遮る物もない遙な地上四五尺のところに、一抹の靄が白く淡く棚引いて居る。更け行く空は、冷き光が皎々と冴え返つて、宗一の身の周圍には一點の人影さへも見當らない。

恍惚とした醉ひ心地を胸に湛へながら、彼は運動場の東北隅にある森の木蔭に凭れた。寂寞たる四邊の沈默の裏に何者かが自分の耳元へ來つて、ロマンチックな、センチメンタルな、哀韻の囁きを傳へるやうな氣持がした。

（新選谷崎潤一郎集）

二三　曼珠沙華

近松秋江

拜啓、曼珠沙華の油畫、たしかに受領致候間、御安心被下度候。曼珠沙華は、吾々の生國邊にては、死人花と申し、あまり心持のよき花にては無之候へども、この花を見る時は、種々

幼き折の懷かしき聯想、自然に浮かび出で申候ゆゑ、かうして多年生國を離れて、他鄕に流寓しをる吾等に取りては、忘れ得ぬものの一つにて候。幼き頭腦に深く印象をのこしたる故鄕の山河の形態、種々の自然の色彩、さして勝れたるものとは思はねども、その色々の形の年と共に記憶に新になり行くやうに被存候。英國の湖畔詩人ウオーヅウオースが、幼時を追憶して、靈魂の不滅を歌へる長詩の心は、この詩を始めて讀みし時には、味解するを得ざりしが、十年を經、二十年を經たる今日、時々想ひ浮かべ候へば、淸純なる我が心の奥に、獨り靜かに省みて、漸く會得出來候やうに存候。

今にして思へば、幼時の心は、恰もこの曼珠沙華の咲き溢れたる初秋の野邊の照り輝く日の光の如く麗かにして、かつ淸純なりきと申候べきか。盛夏の炎威次第に衰へて、大

ウオーヅウオース　william wordsworth (1770-1850) 英吉利の近代詩人。

空の色いつしか鏡の如く明らかになり、爽かなる初秋の風の野をわたる頃になり鎭守の宮の馬場、西北の山裾なる水車小屋に通ふ土堤、田圃の中の小溝の緣などに、眼の覺むるやうなる眞紅の曼珠沙華は、眞直なる細莖を拔きて咲きつつ、うら盆過ぎて舊曆八朔の頃より、一しきり盛んに出づる赤蜻蛉は、冴えたる初秋の日を浴びて、その花の上に群れ飛べる村里の野末の光景、そぞろに想起され候。其等の光景の間に遊び暮らしたりし吾が幼時の心は、今に至りて明らかに懷かしき追憶となりて殘り居り候。

小生先般、三箇月の山居を果して、叡山を下りて歸洛せんとする際、江州坂本日吉の馬場にて、此の花の咲けるを見て、ふと如上の遠き往時を憶ひ出で申候。此の花は年中大都會の中に在りて暮らすものには、終に見る機會もなくて過

ぎ申候。吾等先日坂本にて見たるは、何年ぶりなりしか記憶致さず、多分前申ししとほり、二十餘年前の幼時に、故郷の野邊にて見し以來の事と存候。それゆゑに、かゝる多くの人の殆ど見向きもせざる野花に、心を惹かれたるものならんと存候。曼珠沙華の生花を室内にて眺むることは、いかがなれども、かく油畫にして壁間に掲げ、この花によりて吾が往時を追憶するは、吾が唯今の單調・枯淡なる生活に、少しなりとも潤あらしむる手段と存じ、貴君に此の畫の創作を囑したる次第に候。人に見せんとするにもあらず、ただ吾が記憶に感興を生ぜしむれば足り候。然るになか〳〵巧みなる出來榮えにて、滿足に存候。

私事、先月十三日より輕微なる風邪にて引籠り居り候。昨年は丁度今時分、歸郷の折柄流行の世界風邪に罹り、五六日間臥褥致候。今年はさやうの事なきやう、隨分用心致し居り候。十月なかばの小春日の暖さに、つい薄著をしながら假寢したる間に、引きしものと覺え候。家にばかり閉ぢ籠り候間にも、四圍の風物次第に移り、二階の窓より眺むる東山の樹々、連日色づき申候。吾等隨分長く京都に逗留致候へども、未だ八瀬・大原を知らず候へば、此の秋は必ずそなたへ出遊致度存じ居り候。さだめし野趣深き事ならんと存候。帝國美術院展覽會、十一月二十七日より十二月十一日まで、當地にて開かれ候由の廣告ビラ、其所此所の街辻にかかり居り候。その頃ぜひぜひ御入洛相成度、今より御待ち申し居り候。展覽會の外にも、京都には繪畫を鬻ぐ商店、祇園あたりに少からず、それ等をのぞき歩くも興多く候。貴君にはまた格別の事と存候。駿河屋の飴、虎屋の饅頭進

呈致候、御笑納被下度候。草々

十一月五日　京都東山のほとりより　何某

新制大日本讀本　卷七終

昭和六年六月十三日　初版印刷
昭和六年六月十六日　初版發行
昭和六年十一月二日　訂正再版印刷
昭和六年十一月七日　訂正再版發行

不許複製

新制大日本讀本

	定價
自卷一至卷四	金六拾參錢
自卷五至卷十	金五拾八錢

附奥

著作者　藤村作

發行兼印刷者　東京市京橋區銀座一丁目五番地　大日本圖書株式會社　代表者專務取締役　杉山常次郎

發行所　東京市京橋區銀座一丁目五番地　大日本圖書株式會社　振替口座東京二一九番

東京・株式會社秀英舍印刷

小田

小田

小田傳章

四分二

小田傳章

亭子院の歌合

あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪